

啄木の作歌過程の心理学的分析

——「東海」歌への分析—総合的アプローチ——

大 沢 博

はじめに

東海のとうかい小島の磯のこじまのいそ白砂しろすなに

われ泣きぬれて

蟹かにとたはむる

石川啄木の処女歌集『一握の砂』の冒頭におかれたこの歌は、啄木の歌のなかでもっとも有名な歌である。この歌ははじめ、歌稿ノートの『暇ナ時』に連作歌の一つとして、「東海の小島の磯の白砂に我泣きぬ／れて蟹と戯る」と二行に書かれたものであるが、そのノートの最終頁には、「我」が「われ」に、「戯る」が「たはむる」になおされて、五行に大書されている。歌集の冠頭を飾ったということとあわせて考えると、啄木にとって、非常に重要な意味をもつ歌であったと思われる。

しかし、この歌の解釈となると、諸家の見解がまちまちで、解釈上の論争がきわめて多い歌といわれている。私のみるところでは、連作歌の一つであったこの歌を、作歌心理を考慮せず、前後の諸歌から多かれ少なかれきりはなして解釈していたところに、従来の諸家の解釈のしかたの弱点があったと思う。石田六郎は、『暇ナ時』の諸歌を、作歌順序に従って系統的に分析するということを試み、『啄木短歌の精神分析——肉筆歌稿「暇ナ時」の分析——』（石田神経科昭四六）を著わしたが、「東海」歌にもっとも力を注ぎなが

ら、主要歌として二百七十七首を精神的に解説した石田でさえも、「東海」歌直前の四首を解説から除いてしまっている。

私は、この歌と、その前後に作られた諸歌との関連を分析的に考察することからはじめて、この歌に焦点を合わせた作歌過程推定の研究を行なってきた。その一部は、既に「啄木の作歌心理——『東海』の作歌過程について——」という題で、『地方公論昭五（四）』（岩手県都南村地方公論社）に発表した。本論文は、その容を整理し、とくに研究方法をより明確にした上、その後の研究を加え、論究を深めようとするものである。

歌稿ノート『暇ナ時』について

『暇ナ時』は、明治四十一年六月十四日から同年十月十日までの作歌、六百五十二首が書きつけられている歌稿ノートである。この年の四月下旬、啄木は「モ一度東京へ行って、自分の文学的運命極度まで試験せねばならぬ」（日記 明41・4・25 筑摩書房啄木集。以下同書）という決意をいだいて、北海道から単身上京し、田一京助氏の下宿、本郷菊坂町の赤心館に同宿するようになった。五月中に小説「菊池君」「病院の窓」、六月に入っても三日に「天鷲絨」、十二日に「二筋の血」という小説を脱稿した。『暇ナ時』には、題字のそばに「六月十四日ヨリ」と書かれているが、その日の

日記には「金が少しでもあると、気が落付かなくていけない。今日は三度も四度も外出した。金のある時は何も書けぬ。自分は矢張貧乏の方がよい様だ。」とある。

上京直後の五月上旬以来、啄木のところには、京橋の植木貞子という女性の訪問がつづいてしたが、六月二十日の日記には「九時頃貞子さんが来た。かへりに送ってゆかぬかと云つたが、予は行かなかつた。窓の下を泣いてゆく声をきいた。／我を欺くには冷酷が必要だ！／貞子さんに最後の手紙をかいて寝る。」と書いている。

その三日後、二十三日の夜から爆発的作歌活動がはじまった。翌日二十四日の日記には「昨夜枕についてから歌を作り初めたが、興が刻一刻に熾んになつて来て、遂々徹夜。夜があけて、本妙寺の墓地を散歩して来た。たとへるものもなく心地がすがすがしい。興はまただつづいて、午前十一時頃まで作つたもの、昨夜百二十首の余。」とあり、歌興はさらにその翌日にもつづいて、二十五日の日記には「頭がすっかり歌になつている。何を見ても何を聞いても皆歌だ。この日夜の二時までに百四十一首作つた。父母のことを歌ふ歌約四十首、泣きながら。」とある。三日間で約二百六十首の歌を作つたのである。『暇ナ時』の歌全体の三割強である。「東海」歌は、この爆発的作歌活動のさなか、二十四日午前中の作歌である。「以下六月二十四日午前五十首」という書き込みから八首目である。

なお、この研究のために私が使用した『暇ナ時』の資料は、『石川啄木肉筆歌稿暇ナ時』（八木書店 昭三）である。

研究方法

研究方法について述べる前に、その前提を明らかにしておかねばならない。第一の前提は、「東海」歌は象徴歌であろう、という疑いから出発するということである。前後の諸歌との関連を考えるに、この歌が文字通りの磯の白砂や蟹を歌つたものとは、とても思

えない。『石川啄木事典』（司代隆三編 明治書院昭四五）には『暇ナ時』の作品にはまだ『明星』の影響が強く、比喩・象徴あるいは空想的なものがほとんどで」と書かれている。では、象徴ということについて、啄木自身はどういう態度をとっていたであろうか。書簡（明41・5・7 吉野章三宛）と日記（明41・5・8）に、象徴芸術という語を使って、同じ意味の文章を書いている。書簡の一部分を引用しておく。

「自然主義は勝つた。確かに勝つた。然し今其反動として多少ロマンチックな作にあこがれて居る人は決して少くない。けれども此反動は自然主義の根本に対する反動では無くて（僕の見るところでは）唯自然主義が余りに平凡事のみを尊重する傾向に対する反動だ。今は恰度自然主義が第二期に移る所だ。乃ち破壊時代が過ぎて、これから自然主義を生んだ時代の新運動が、建設的の時代に入る。僕は實際よい時に出て来たよ。」

そして、第二期の自然主義の時代の半分以上過ぎた時、初めてホントウの新しいロマンチズムが胚胎するに違ひない。その二つが握手して、茲に初めて、真の深い大きい意味に於ける象徴芸術が出来あがる。」

同じ意味の文章を日記にも書いていることでもあり、少なくとも、啄木において「真の深い大きい意味に於ける象徴芸術」への志向があった、といえるであろう。

第二の前提は、一定の時期に連続して行なわれた作歌活動の基底には、基本的に同じ心理過程が連続している、と予想しておくということである。換言すれば、「東海」歌は連作歌の一つであるので、その前後の諸歌に同じモチーフが続いていることが判つた場合には、「東海」歌のなかに、何らかのことはそれが象徴的に表現されている可能性が高い、と考えるのが自然である、という立場に立つということである。

以上の二つのことを前提として私が研究しようとするのは、「東

- 海」作歌時の心理過程はどんなものであったか、特に、「東海」歌に象徴的に表現しようとしたことは何であったかを推定することであり、その研究過程において、前後の作歌の心理過程をもできるだけ分析的に推定していくことである。さらに、推定された心理過程の中心について、それが何故発生したか、その経過を解明していくことも試みたい。このような研究を行なうための基本的な方法は分析と総合である。その具体的な手続を述べれば次の通りである。
- 1、近接している歌のなから、意味が明確な部分A¹を見出す。
 - 2、他の歌のなから、A¹と同じ意味を表現していると思われる部分A²、A³……を見出す。
 - 3、A¹、A²、A³を総合して、Aの意味をより明確にする。
 - 4、日記、書簡、証言などの資料と照合して、できるだけAの意味の裏づけを見出す。
 - 5、「東海」歌の前後の諸歌に、Aが連続しているとみなされる場合には、「東海」歌の中にAが象徴的に表現されている筈であると考え、Aにもっともふさわしい語A¹を見出す。
 - 6、A¹を手がかりとして、「東海」歌の他の部分B¹の意味について仮説を立てる。
 - 7、他の歌のなかに、B¹と同じ意味を表現していると思われる部分B¹、B²……を探す。
 - 8、前記の手続で、「東海」歌の各部分の意味についてそれぞれ仮説を立てた上、全体として秩序ある意味に総合する。

「東海」歌とその前後の歌

論究に入る前に、『石川啄木肉筆版歌稿暇ナ時』によって、「東海」歌とその前後の歌計十七首をあげておく。それぞれの歌の改行のしかたは歌稿通りである。

君よ君君を殺して我死なむかく我が
いひし日もありしかな

君が名を仄かによびて涙せし幼
き日にはかへりあたはず

〔幼き日には〕と「かへりあたはず」が抹消されて、それぞれ「十四の春に」と「かへるすべなし」と推敲され、冒頭の「君」のわきに「己」と赤ペンで付記されている―筆者〕

憂き事の数々あるが故に今君みて
かくは泣くと詫びてき

〔詫びてき〕が抹消され、「泣く人」と推敲された―筆者〕

故さとの君が垣根の忍冬の風をわす
れて六年経にけり

赤き青き顔さまさまの鬼の中にまじ
る白鬼君によく肖る〔全部抹消―筆者〕

君などか一日笑はずひそかにも思ふ
ことあり薬草を煮る (五十五首)

以下六月二十四日午前五十首

君が名を七度よべばありとある国
内の鐘の一時に鳴る

天外に一鳥とべり辛うじて君より
通れ我は野をゆく〔ゆく〕が「走す」と推敲された―筆者〕

我が母の腹に入らむと我掌て争
ひし子を今日ぞ見出でぬ

〔我かつて〕と書きはじめたが「かつて」を抹消して、「が母の」とつづけた。「入らむ」は「入るとき」と推敲された―筆者〕

ただ二目見えて去りたる彗星の跡を追

ふとて君を踏みける

〔を踏みける〕が「が足ふむ」と推敲された―筆者）

身がまへて我ははったと腕まへぬ誰ぞ
鬼面して人を脅すは

〔我ははったと〕を「はったと我は」と倒置し、「脅」のわきに「嚇」と付記―筆者）

もろともに死なむといふを卻けぬ心や
すけき一時を欲り

野にさそひ眠るをまちて南風に君をや
かむと火の石をきる

東海の小島の磯の白砂に我泣きぬ
れて蟹と戯る

〔磯に泣〕といったん書いて「に泣」を抹消し、「の白砂」とつづけた―筆者）

青草の床ゆはるかに天空の日の蝕
を見て我が雲雀病む

待てど来ず約をふまざる女らを殺すと
喚くとき君は来ぬ

〔女らを〕が「女皆」に、「喚く」が「立てる」に推敲された―筆者）

水晶の宮の如くに百万の玻璃盃をつみ
爆弾を投ぐ

（全部抹消されたが、「百万の」のわきに「かずしれぬ」と付記されている―筆者）

「蟹と戯る」に つづく

まず第一に、「東海」歌の「蟹」は、一人の女性を象徴したものであるという仮説を検証していくことにする。

私は、「もろともに死なむといふを卻けぬ心やすけき一時を欲り」を読んだ時、啄木は、当時一女性との間に、心中を迫られる程の関係があったのではないか、という仮説が私の頭に浮かんだ。この歌を、「一人の女性から心中を迫られたが拒否した。心が非常に落着かない。心を安めたい、少しの時間でも。」と読みとったからである。次の歌には「君をやかむと」、「東海」歌から二首目には「女らを殺す」、さかのぼると「君を踏みける」「争ひし子」「君より遁れ」「白鬼君によく肖る」「君よ君君を殺して我死なむ」など、深刻な女性関係を思わせる歌が目につく。

では啄木には、実際にそのような女性関係があったのだろうか。私は啄木日記を調べた。上京後間もなくの五月七日に「植木てい子さんから葉書、返事を出す。」と書いている。以後連日のように日記に登場するのが、この植木貞子である。彼女からの来信と訪問のことが続々と書かれている。「東海」作歌前日までに葉書九回、手紙四回、訪問十八回である。五月十七日には、啄木の方からも京橋の貞子宅を訪問している。

啄木は、五月二十四日には「六時半何やら夢を見て居て、何の訳ともなしに目が覚めると、枕元に白いきものを着た人が立って居る。それは貞子さんであった。食前の散歩の序、起してやらうと思つて来たとの事。」と書き、二十七日には「目を覚ますと枕辺に座れる白衣の人、散歩の序と云つて貞子さんが来てゐたのだ。」と書いている。やがて六月二十日の日記には「九時頃（午後―筆者）貞子さんが来た。かへりに送つてゆかぬと云つたが、予は行かなかつた。窓の下を泣いてゆく声をきいた。／我を欺くには冷酷が必要だ！／貞子さんに最後の手紙を書いて寝る。」とある。翌日二十一日には「夏帽子を求めて宿にかへると、留守中に貞子さんが来て入つて行つたとの事で、机の中には手紙！／小説の一断片は、悲しき結末に急いだのだ！」、二十三日には「貞子さんから今夜是非来てくれといふ葉書が来たが、行かなかつた。／恋をするなら、仄か

な恋に限る。(略) 終日雨降であつたが、減多にない程頭の明瞭した日であつた。暮れてから一寸出て花瓶を一つ買つて来た。其あとに貞子さんが来て行つたといふ事であつた。」と書いてある。この夜、枕についてから爆発的作歌活動がはじまつたのである。

金田一京助は『石川啄木』(角川文庫 昭三〇)の中で、「往年(三十八年)新詩社が江東伊勢平楼で劇をやつた時に、半玉に借りた京橋の踊りの師匠の娘さんと、色の真白なふっくりした水の垂れるような若い綺麗な植木さんというのがいた。四十一年、石川君が北海道から上京して私と同宿した時に、三年振り旧好を暖めて、よく石川君を訪問して来て一時色々のロマンスがあつた。」(傍点筆者)ということや、啄木についても「初は、綺麗な下町娘の、殺風景な、無聊な下宿へ、天から降つたように、目の前にあらわれるのが嬉しいことであつたんだが、朝寝をしている所を、知りつつわざと寝込を襲つてやってくるようになった頃、少からず弱らされて、どうかして居留守を使って返そうと苦心したが、そうなると、水の垂れるような若い娘も大胆になるものだ。取次が何と云おうと、下駄を脱ぎすて、さっさと二階に上つてしまふので、下宿の主婦の気持を悪くし、惹いては、石川君に対する心証をも極度に悪化せしめて行つた。」ということ、さらには、啄木が、彼女と「行く所まで行つてしまつていた」という告白をしたことを書いてある。告白場面については「いくら何でも、そのことを、君の言葉どおりにばばに書き切れない。が、君には深い慚悔と共に、強い憤があつた。普通の場合と違って男性の君自身の方が寧ろ被害者、少くとも被誘惑者の立場で、それでだんだん堪え難い嫌悪になつて、避けようと焦慮して、来訪するその人の声に、顔色を替えたり、私に監視役然と無理無理室へ呼んで闖入者たらしめたりしたものだった原因が始めてわかつたのであつた。」と書いてある。

石井勉次郎(『私伝石川啄木—暗い淵—』桜楓社 昭四九)によれば、この貞子こそ、啄木の結婚式の頃、彼を悩ませた女性であつたのである。明治三十八年五月、節子との結婚式の日取りがきまつたが、その準備を友人に依頼していた上京中の啄木は、言を左右にして離京を拒み、遂には友人監視のもとに汽車に乗せられるということになつた。ところが離京直前の啄木に女からの遺書が届き、それに「自殺する」とあつたので、「死のうか、社会から隠遁しようか」と悩んだ。しかも友人には、愛人が絶望して自殺したというショックキングな告白をしたという。その女というのが当時十六歳の貞子であつた、というのである。そして石井もこの著書で、「歌稿ノート『暇ナ時』を調査すると、特に六月から七月にかけての作歌には、貞子との恋愛問題を発想の基底に秘めたものが、無数に散在する。」と述べている。しかし「東海」歌との関係については述べていない。

「心中を迫られた」を裏づけるまでの資料は見当たらないが、啄木は貞子と深い関係になつてゐたこと、しかし貞子避けたくなくて絶縁状を書いたこと、それでも貞子はなほやってくるという状況で、深刻な心的葛藤に陥つてゐたといふことは明らかになつたであらう。

次に、「東海」歌の前後の歌の中に、貞子のイメージを表現しているものと解されるものを探し出そう。前節にあげなかつたが、『暇ナ時』初頁八首のうち、冒頭の歌を含む四首は貞子のイメージを含んだ歌と思われる。冒頭の歌「手に手とる時忘れたる我ありて君に肖ざりし子を思出づ」の「手に手とる」「君」、「己れ死なむかく幾度かくりかへし」さめたる恋を弄ぶ人の「人」、「日に三度たずね来し子は我とはぢ苦し死なんといつはりいふ」の「子」、「あなくるしむしる死なむと我にいふ三人のいづれ先に死ぬらむ」の「死なむ」といふ人は貞子であつたらうと解される。

前節にあげた歌ではどうだろうか。「君よ君君を殺して我死なむ」の「君」、「憂き事の数々あるが故に今君みてかくは泣くと詫びる」、あるいは「泣く」人、「白鬼君によく肖る」の「君」、「君などか

日笑はず」の「君」、「天外に一鳥とべり辛うじて君より遁れ」の「君」、「もろともに死なむといふ」人、「野にさそひ眠るをまちて南風に君をやかむ」の「君」、「待てど来ず約をふまざる女らるるを殺す」の「女」、これらはみな貞子を意味しているものと思われ「白鬼君によく肖る」は、金田一の貞子の印象「色の真白な」とびつたり符合する。

これらのほか、「我が母の腹に入らむと我嘗て争ひし子を今日ぞ見出でぬ」、「身がまへて我ははつたと腕まへぬ誰ぞ鬼面して人を脅すは」、「水晶の宮の如くに百万の玻璃盃をつみ爆弾を投ぐ」も、貞子に関連しての攻撃的破壊的感情や脅威感を歌ったものとみなされよう。

「東海」歌の近くの作歌で、残るは隣接の「青草」歌だけである。この歌は貞子と無関係であろうか。「青草の床ゆ」の「床」(とこ一筆者)がある。啄木は『詩談一則』(『岩手日報』明37・1・1)で、「腕さし交して眠れる男女の青草の和床に」という文を書いているし、近くは十二日前の六月十二日に脱稿した小説、「二筋の血」の末尾近くで、「所詮は皆一様に死ぬけれども、死んだとして同じ墓に眠れるでもない。大地の上の処々、僅か六尺に足らぬ穴に葬られて、それで言語も通はねば、顔も見ぬ。上には青草が生える許り。男と女が不用意の歓楽に耽つてゐる時、其不用意の間から子が出る。(傍点筆者)と書いている。啄木において、「青草」と「性関係」の連合があつたことは明瞭である。したがって、「青草の床」は、この時期の状況からみて、貞子との性関係の場を意味していた、といえよう。

かくて「東海」歌は、少なくとも直前に連続三首、直後に連続三首の、貞子を含む歌にはさまれていることになる。そこで、「東海」歌の中にも貞子が象徴的に表現されている可能性が高い、と考えるのが自然である、という立場に立って、「東海」歌の中に貞子をみつけよう。女性を象徴しうる語として一番可能性の高いのは、「蟹」

であると思う。「我」を除いては「蟹」だけが生物、しかも動物で、下に「と戯る」がつづいている。蟹は一見かわいい小動物だが、いたづらをすれば、はさみを使って攻撃してくる。一旦はさんだらなかなかに離してくれない。まさに、当時の啄木にとって、絶縁状を書いてもなおやってくる、植木貞子の象徴としてびつたりではないだろうか。

ところで、啄木は丁度一年前に北海道で、「蟹に」という詩を作っている。この詩には「東の海の砂浜の／かしこき蟹よ、今此処を／運命の浪にさらはれて／心の籠の燈明の／汝が眼よりも小やか／滅えみ明るみする子の」という部分がある。私は、この詩において、「蟹」は女性の象徴であつたと推定する。この場合には妻節子である。節子と推定する根拠のひとつは、「東の海」ということばである。啄木が「東海」ということばを使うようになったのは、白百合の君節子から英詩「東海より」をおくられてからである。「東の海」は、節子を連想する「東海」を分けて使つたものと思われる。例証をあげよう。石田六郎(前掲書)は、『暇ナ時』初頁第三首の「漂泊の人はかぞへぬ風青き越の峠にあひし少女も」のモデルは、宮城県荻浜の佐藤藤野と推定している。「風青き越の峠」に、荻浜名所の風越峠の名が織りこまれているとみなし、これが啄木得意の外連合的モデル被覆技法であると述べている。

詩「蟹よ」の「蟹」を節子と推定する根拠の第二は、「汝が眼よりも小やかに」という表現である。これは「汝が眼」も小さいことを暗示している表現である。節子の眼は、写真でみるとかなり小さいのである。

このように、詩「蟹に」の「蟹」も女性の象徴と推定されることでもあり、「東海」歌のように、その前後に、女性に関連する歌がそれぞれ連続して作られている場合には、「蟹」を女性の象徴とみなすことの妥当性は高いであろう。そしてこの場合には、日記などの資料からみて、植木貞子と推定される。

次に「蟹と戯る」について検討する。「蟹」を貞子とみなせば、「貞子と戯る」という意味になる。「東海」歌から十三首目の推敲前の歌は、「我君をかきむかくぞ戯れにいひし日よりぞ君は我を怖れず」である。「戯る」と共通の文字ならびに意味を有する「戯れに」が、性関係を意味することば「をかきむ」と連合して使われている。そして、『暇ナ時』初頁第二首は、「己れ死なむかく幾度かくりかへしさめたる恋を弄ぶ人」である。「さめたる恋を弄ぶ人」は貞子であろう。第六首は「日に三度たづね来し子は我とはち苦し死なんといつはりをいふ」である。これらの歌との関連を考えると、「と戯る」は、性関係にまで入ってしまったいつわりの恋愛関係と解することができよう。

「白砂」について

「白砂」については、これを分けて「白」からとりかかすることにす。まず初めに、「白」を含む歌を抜き出してみる。歌の下の括弧の中の数字は、『暇ナ時』に書かれている順番を示す。「東海」歌は七六番目である。歌のわきの括弧内は、『啄木全集第一巻』(筑摩書房 昭四九)に従って、抹消または訂正以前の原型を示す。以後同様である。

牛頭馬頭のつどひて覗く大香炉中より一縷白き煙す(一八)
 大海にうかべる白き水鳥の一羽は死なず幾千年も(一九)
 白き鳥つと水出でて天空にとべりその時君を忘れぬ(五六)
(空にとび去るその時君を忘れぬ)
 (赤き青き顔さまさまの鬼の中にまじる白鬼君によく肖る)(六七)
 いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出でし白き骨共(一一〇)

「白鬼」に肖ている「君」は、前述したように貞子であろうし、「白き骨共」は宝徳寺墓地で見た白骨のことと思われるので、これら二首は除いて、象徴的な前の三首の「白」の意味を探究しよう。

「白き煙」と「白き水鳥」については、石田(前掲書)の解説「香炉に立ち昇る一条の白煙は死者の霊であり、不死なる白き水鳥は霊鳥である。死は不死なるものである。それゆえ、この一羽の白き水鳥は幾千年も死なず、永遠に生きつづけるのである。」が適切と思うが、「死なず」ということばに、死者復活願望がこめられていよう、ということをおは加えたい。

次の「白き鳥」も「白き水鳥」と同じであろう。ある死者のイメージが頭に浮かんで来たので、「君」すなわち貞子のことを忘れてしまった、という意味と考えられる。以上の分析結果を総合すれば、「白」は、啄木が復活願望をいだいていた死者の霊の象徴と推定される。

次は「砂」である。「砂」については、「東海」歌から大はばに作歌時期がはなれている歌もとり上げる。何故ならば、啄木は「砂」の歌を沢山作っているからというだけではなく、処女歌集につけた名が「一握の砂」であり、その冒頭におかれた歌が「東海」で、そのすぐ後にいくつも「砂」の歌をならべているところからみて、「砂」は啄木において極めて重要な象徴語であった、と思われるからである。啄木の創作心理理解のためのキーワードであろう。「砂」の歌を列挙してみる。

朝ゆけば砂山かげの緑叢の中に君居ぬ白き衣して
 夕浪は寄せぬ人なき砂浜の海草にしも心理もる日
(以上明四〇・五・一一)
 冬の磯氷れる砂をふみゆけば千鳥なくなり月落つる時
(明四一・三・一九)
 頬につたふ涙のごはず一握の砂を示しし人を忘れず
(明四一・六・二四)
 初めよりのちなかりしもの如ある砂山を見ては怖るる
 わが友は北の浜辺の砂山の浜茄子の根に死にてありにき
 九十九里つづける浜の白砂に一滴の血を印さむと行く
(以上明四一・六・二五)

月明き秋の浜辺の白砂に高く笑ひてかなしかりけり

(明四一・八・八)

いたく錆びしピストル出でぬ砂山を指もて掘りてありしに

ひと夜さに嵐来りて築きたるこの砂山は何の墓ぞも

砂山の砂に腹這ひ初恋のいたみを遠くおもひ出づる日

砂山の裾よこたはる流木にあたり見まはし物言ひてみる

いのちなき砂のかなしきよさらさらと握れば指のあひだより落つ

しつとりとみだを吸へる砂の玉なみだは重きものにしあるかな

大といふ字を百あまり砂に書き死ぬことをやめて帰り来れり

(以上「一握の砂」から)

以上の歌についていえば、「砂」と直接結合されて一語を構成しているのは「山」がもっとも多く七回、次いで「白」「浜」それぞれ三回である。それぞれの歌の中の、それら以外の語で、二回以上使われているものを抜き出すと、「涙(なみだ)」が三回、「かなし」「いのちなき(なかりし)」「死」がそれぞれ二回である。このように分析してみると、「砂」は死との関連が強いようである。

私は「ひと夜さに嵐来りて築きたるこの砂山は何の墓ぞも」の歌に注目した。この歌には「墓」という語が使われているのである。

石田(前掲書)も「砂」の歌は徹底的に検討し、「砂山―嵐―暴力―死者―墓―初恋」という作者の内的連関を指摘した。私にはさらに、もっと具体的に、「砂山」は土葬の土まんじゅうの象徴ではないか、という仮説がうかんできた。私は、昭和四十九年か四十八年に、浜民の宝徳寺の墓地で、新仏が土葬されたばかりの土まんじゅうを見て、今どき珍らしいと思ったことがあり、それが想起されたのが、この仮説のうかんだ契機である。

私は、啄木と同様に宝徳寺で育った遊座昭吾氏に、啄木時代の同寺の葬い方を中心にお訊ねしたところ、当時はほとんど土葬であったこと、現在でも土葬にする檀家かなり多いこと、墓地の地質は黒い土であるというお答をいただいた。

「砂山」の背後に土葬の土まんじゅう、「砂」の背後にその土を想

定すると、啄木の「砂」の歌の心理的意味が明瞭になってくる。「朝ゆけば」の歌の「白き衣」して居る「君」は、白い死装束の亡き女性のイメージではなかったろうか。函館での夜の歌会での作歌であるが、その日の日記には、「一人どこかへ行って泣きたい程、浜民が恋しかった。」(明40・5・11)と書いているのである。「一握の砂」は、埋葬の時に、肉親から順にふりかける一握りの土のことであろう。「砂山を見ては怖るる」の意味も明瞭になる。「砂山の砂に腹這ひ」の歌の、「初恋のいたみ」も、土葬された初恋の人を想定すれば、意味がはつきりする。「いたく錆びしピストル」は白骨、「流木」は、塔婆の象徴的表現と理解される。

啄木は、「白骨」の歌や詩も作っている。前にあげた「いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出でし白き骨共」のほか、「東海」作歌の約一カ月後、七月二十二日には、「山といふ山をくづさば各々に皆二組の骨や見出でむ」という歌を作っている。「砂山」の原風景は土葬の土まんじゅうである、という仮説を裏づけている、といつてよい歌である。この二日後の二十四日から二十五日にかけては、啄木は、「流木」「森の中」「山頂」「黒き箱」「白骨」「老人」「一塊の土」という詩を作っている。私のみるところ、すべて死との関連性が強い詩である。このうち、「老人」(詩稿)は、「我が胸の底の底」に、「小さき房」があつて、そこに老人が一人座り、何か呟やき、「寒き笑ひを頬にうかべ、かりりかりりと一片の骨を噛んでいるが、その骨は「あはれ、そは既に幾年、わが胸に死にて横ふ、初恋の人の白骨」である、という詩である。

ここでまた遊座昭吾氏に、「啄木が墓地で白骨をみた、ということとはあり得るでしょうか。」とお訊ねしたところ、「私はしょっちゅう見ました。新しく土葬するたびに穴を掘ると、白骨が出てきます。白骨を見るのは日常茶飯事でした。啄木も見たいことは確実でしょう。」というお答であった。

以上の分析結果や証言を総合すると、「砂」は土葬の土まんじゅう

うの土であり、そこに葬られている死者の象徴である、と思われる。そして、その死者は「初恋人」であった疑いが濃厚である。しかも「怖るる」という感情を、啄木の心に生じさせている、と思われるのである。

結局、「白」も「砂」も死者、または死者の霊の象徴であろう、ということになったが、同一の死者のことであろうか。私は、「白」と「砂」ではニュアンスが違うことに気づいた。「白」には啄木の死者復活願望あるいは思慕が感じられるが、「砂」には啄木の恐怖感あるいは無気味感が感じられるのである。そこで私は、このような心理的意味にふさわしい対象を、それぞれみつけた方がよいと思うようになった。

可能性のある対象は、亡き長姉田村サタ（通称さだ）と、弘済童女沼田サタ（通称サダ子）である。長姉サタは、啄木が六歳の時、田村叶と結婚した。啄木は、中学時代のうち十四歳から十七歳まで、この田村家に寄寓し、世話をしてもらった。「十四の春」は、まさに、この姉に世話をしてもらうようになり、しかも近隣の堀合節子を識った年である。明治三十七年、姉サタは夫叶の転職により小坂鉦山に赴いたが、三十九年二月、三十一歳で死去した。啄木はその時、代用教員であった。

啄木は、この亡き姉への思いについて、四十一年の日記に何回も書いている。宮崎郁雨からの、娘京子昏睡という至急の手紙が届いた五月二十四日には、「八時半まで金田一君と話した。予は、亡き姉と其子等の事を語った。」と書き、京子の病状についての、宮崎からの二度目の手紙が届いた二十八日には、「夜にな「る」とすぐ枕についた。雨の音、竹の声、古い日誌を出して見て幾度も幾度も泣いた。死んだ姉！ 其子等！ あゝ洪民！ 函館！ 小樽！ 泣くべき事が、かなしいかな、予の半生に極めて多い。」と書いている。自殺した川上眉山の事について考えた六月十七日には、「夜金田一君と語る。予は予の姉——亡き姉の事を詳しく語った。何とも

云へぬ心地になった。十二時半頃になると、女中が来て、モウ話をやめてくれと云ふ。」と書いている。今井泰子『石川啄木論』塙書房 昭四九）は、「姉サダは明治三十九年二月末（啄木代用教員時代）に死んだ。石田は看過しているが、啄木はそれ以後、激しい退行を起こす際には必ず亡姉を想起している。」（四八〇頁）と述べているが、実際この時期も、苦境に陥るたびに亡姉を思い出ししているのである。

「東海」作歌前後に、亡き姉は歌われたであろうか。「東海」歌の十首前に、「故さとの君が垣根の忍冬の風をわすれて六年経にけり」という歌がある。「六年経にけり」に注目し、六年さかのぼると、中学校退学のため、この姉の家から離れた年になる。亡姉サタを想起していたとみなしてよいであろう。

沼田サタは、宝徳寺再建の功労者、大工沼田末吉の娘で、啄木八歳時に、ジフテリアのため十一歳で急死した少女である。この沼田サタを、啄木の文学的創造の原動力に関わる対象として、初めてとり上げたのが石田六郎である。石田は「二筋の血」を啄木の自伝小説とみて、少女佐藤藤野の死（戒名—清光童女）に相当する事実の発見をめざし、弘済童女という戒名の刻み込まれた沼田サタの墓を、宝徳寺の墓地に発見した。その成果を中心にしてまとめた著書が、『初恋人の魂追った啄木の生涯——啄木の精神分析——』（石田神経科 昭三八絶版）である。

石田によれば、秋浜なほ氏は「啄木さんが小さい時好きな女の子だったらサダ子だコッタ。末大工の娘のサダ子」と言った、ということである。啄木の妹三浦光子は、著書『兄啄木の思い出』（理論社 昭四〇）で、「サダの家は内福で、継母は始終機織りをしていた。妹の八重子などはいつも手織りの小ざっぱりした物を着ていたがサダは違っていた。虱のたかるようなボウボウの髪をして、よごれた着物を着て、継母が産んだ児を背負わされていた。それで小学校にはいるのが遅れて九歳かではいった。二、三年生のころジフテ

リヤで死んだが、そのとき継母は味噌をつけた握り飯を一つ枕もとにおいて野良に働きにでておったので、虐待死ではないかと取沙汰されたものだった。」と述べた上で、「私は二人が仲よく遊んだのを見たこともないし、遊ぶわけもないと思っている。(略)もし幼き日の恋があったとしてもサダとは思えないし、その死が啄木に影響したとは思えない。」と、石田の意見に対して否定的見解を示している。これに対して石田は、『啄木短歌の精神分析』で、「拙著を讀まずに執筆されたもので書評ではない。当然のことながら、論点もはずれている。」と返している。

私は、少なくとも小説「二筋の血」の「清光童女」、詩「お蝶」「梟」「凌霄花」などは、沼田サタがモデルであったと思う。「清光」(セイコウ)は石田の言う通り、弘濟(コウセイ)という音を顛倒した外連合によって結んだものであろう。「お蝶」は母を亡くした娘であるし、「梟」の「牧の児」は、やはり母なく、「三夜の病」があらたまつて母のあとを追ふのである。「凌霄花」では、「君逝きしより世を忘れ」と、この世にない「君」を歌っている。しかし私には、啄木にとって沼田サタは、普通の意味の初恋人であったとは思われない。何故か啄木は、沼田サタの名前をどこにも書いていないのである。ただ、執筆年月不詳のメモ「彼の日記の一節」の女性リストには、「The daughter of carpenters.」という語がある。「大工の娘」の意味である。妹娘ヤエの名前はこのメモの最後の、「忘れな草」(ドイツ文字)という見出しの下に出ているので、英語の「大工の娘」は、サタを指していたものではないだろうか。

「東海」作歌の約一カ月前の詩「小さき墓」も、実際に小さい墓である弘済童女の墓がモデルであったと思われる。啄木は、この詩に対して否定的態度をとっている。すなわち、同じ日に全部で八篇の詩を書いたが、「小さき墓」を除いて、ほかの七篇を「泣くよりも」と題し、与謝野氏に送ったのである。これは、この日の朝、娘京子が昏睡という手紙を受け取って、頭が氷った様な気がしたこと

と関係があったであらう。

「東海」歌の十二首前には、「君が名を仄かによびて涙せし幼き日にはかへりあははず」という歌が作られたが、啄木は「君」を「巳」に、「幼き日には」を「十四の春に」となおしている。この歌の「君」は、二首後の「故きとの君」との関連も考えると、幼き日から母のように可愛がってくれた、亡き姉と思われる。それをなおしたのは、同名である沼田サタを連想することに抵抗があったからではないだろうか。

「砂」は土葬の墓の土の象徴と推定しておいたので、亡姉と沼田サタそれぞれの埋葬と啄木との関係について述べておこう。姉サタの場合、啄木がその死因を知ったのは二十五日後であり、埋葬に立ち会えた筈はない。沼田サタの場合には、宝徳寺墓地への埋葬であり、しかも寺の建築の功労者、末吉の娘であったので、当時八歳の啄木も参列して、一握りの土をふりかけた可能性は大きい。少なくとも、啄木が沼田サタの墓を日常みていたことは間違いない。

私は、以上の考察にもとづいて、「東海」歌における「白砂」は、「白」が姉田村サタ、「砂」が沼田サタの象徴で、両者共亡き人であり、しかも同名で極めて連想しやすいところから、結びつけて一語を構成したものと推定する。

「泣きぬれて」について

「泣きぬれて」を分けると、「泣き」と「ぬれて」になる。「ぬれて」は、「涙にぬれて」と解しておく。ここでは、何故涙にぬれる程泣いているのかを探究したい。それを行なうための分析資料として、「泣く」「涙」または同類の感情表現を含む歌を使うことにする。なお、隣接の「青草」歌に、作者自身の感情表現として「我が雲雀病む」があるので、「病む」を含む歌も加えることにする。まず、「東海」歌の前の歌から該当歌を抜き出して、一つずつ考察し

ていく。

半身に赤き痣して蛇をかむ人(食ふ)ゆめにみて病おもりぬ (二九)
 頬につたふ涙のこはず一握の砂を示しし人を忘れず (三四)
 帰り来し心をいたむ何処にてさは衣裂き泣きて歩める (三九)
 うら悲し音に啼きしきり病鳥はかの青空にあくがれて死す (四〇)
 わが胸の底の底にて誰ぞ一人物にかくれて濶々と泣く (四一)
 限りなく高く築ける灰色の壁に面して我一人泣く (四二)
 我つねに遠く離れて君唄ふ物に怯えし病犬のごと (五二)
 あなかなしかかる最後もありやとて新婚の日の我を弔ふ (六二)
(幼き日にはかへりあはず)
 己が名を仄かによびて涙せし十四の春にかへるすべなし (六四)

「半身に赤き痣して蛇をかむ人」は、貞子がモデルであったと思われる。啄木は六月十七日の宮崎郁雨宛書簡で、「此方へ来てから、頻りに僕をたづねてくる江戸生れの女があつた。(略) 其女が少し熱情が多すぎて来たからうるさくなつてゐた。と。十日許り以前の事、其女が小さいおできを四つ五つ顔に出して来て、／＼女「貴方は豆がお好きでござんすか?」／＼『さうひです。』／＼『羨ましいわ。私はまた豆が好きで好きで、此頃も毎日の様に蚕豆をたべたもんですから、こんなに顔におできがでちやつて。』(略) 僕は此ソラマメ以来、女は浅間しいもんだと思つた。そしてたまらなくイヤになつた。」と書いてある。小さいおできが四つ五つ顔にできたのを、「半身に赤き痣して」と誇張し、「蛇をかむ」で性行為を暗示したものと思われる。

「頬につたふ」の歌の「一握の砂」は、前述したように、埋葬の際、近い肉親から順にふりかける一握りの土の象徴的表現と思われる。私はこの歌こそ、石田が発見した「清光童女」のモデル、弘済童女||沼田サタの埋葬時の感情体験想起の歌であると思う。頬につたわり落ちる涙をぬぐいもせず一握りの土をふりかけた人、その人とは誰であろうか。啄木自身であると思われる。この歌から七首

目の歌は、「わが胸の底の底にて誰ぞ一人物にかくれて濶々と泣く」である。「わが胸の底の底」の人は、当然作者自身である。「暇ナ時」初頁第一首は、「手に手とる時忘れたる我ありて君に肖ざりし子を思出づ」であり、第八首は「なほ若き我と老いたる我とめて諍ふ声すいかがなだめむ」である。第九二首は「悄然として前に行く我を見て我が影も亦うな垂れて行く」である。このように、自己を明瞭に対象化している作歌が多いので、「一握の砂を示しし人」も、作者自身とみなしてよいであろう。

「帰り来し心をいたむ」の歌は、何らかの過去体験が想起され、その時と同じような心理状態になつてしまったので、衣を裂いて泣き歩きたいほど悲しみ歎いてゐる、と解される。

「うら悲し」の歌の「病鳥」は啄木自身、「かの青空」は文壇を意味し、文壇に飛翔せんとするも、病んでしまつてまゝにならぬ、絶望的な己れの姿を、象徴的に歌つたものであろう。「かの青空」を文壇と解した理由は、「青草」歌のところで述べる。

「わが胸の」の歌は、心の奥の深いところで、人に語ることできない悲しみのため、さめさめ泣いてゐる自分のことを歌つたものであろう。一カ月後に作つた詩稿「老人」は、「わが胸の底の底なる冷やげなる小暗き隅」の「開かざる小さき房」に座れる老人が、「わが胸に死にて横ふ初恋の人の白骨」を「かりりかりり」と噛んでいる、という詩である。「濶々と泣く」は、「死にて横ふ初恋の人の白骨」と関連があると思われる。

次の歌の、「我一人」が面して泣いてゐる「限りなく高く築ける灰色の壁」とは何であろうか。生活苦、家族と離れての生活、娘重病の知らせ、川上眉山の自殺など啄木の心を暗くすることは沢山あった。しかし、この第一と第二は克服可能性はまだあつたらうし、第三は経過がよかつたし、第四は心を暗くさせても、のり越えることのできない壁というような事ではない。私は、この「灰色の壁」は、貞子との関係によつて生じた「帰り来し心」の問題であつたと

思う。それは文壇への飛翔を大きく妨げるものであっただけでなく、死への思いを強く起こさせたものであろう。

「我つねに遠く離れて君隕ぶ物に怯えし病犬のごと」の「君」は、貞子を意味していると思われる。「物に怯えし病犬のごと」とはどいうことだったのか。啄木は、五月二十四日朝、貞子に寝込みをおそわれていた時に、娘京子が重病で昏睡、という至急の手紙を受け取るという体験をしている。しかも前の晩に書いた詩の断片は、

幼児の墓に關するものであった。日記には「ああ、予の頭は氷つた様な気がした。昨夜かいた断片のうちに、幼児の墓に二十年振で父が帰つて来て、お前は死んでよい事をしたと云ふ意味の詩がある。予の頭は氷を浴びせられた！ 京子の昏睡！」(明41・5・24)と書いてある。そして三日後の二十七日朝、またもや貞子に寝込みをおそわれる。この日、夜八時四十分頃、女中が電報を持って来た。

「開かぬうちの胸さわぎ。噫、京は遂に死んだかと思ふと身体中寒くなつた。が／＼ケイクワヨシ、イサイアトヨリ。／予はホッと息をして、胸を撫で下した。涙がー」(明41・5・27)と書いている。貞子の接近中に頭が氷つたような思いを体験したし、再び接近した日にも胸さわぎを体験したので、条件づけによって、貞子が近づくと「物に怯え」るようになったものと思われる。

「あなかなしかかる最後もありやとて新婚の日の我を弔ふ」は、前に述べたように、結婚式直前に貞子から「自殺する」と脅かされ、「死のうか、社会から隠遁しようか」と悩んだ、その頃の心境を想起している歌であらう。

「己が名を」の歌は、沼田サタに関する記述のところで触れたが、姉サタの名を仄かによんで涙を流した、幼き日を回顧した歌であると思われる。しかし、「君」を「己」に、「幼き日にはかへりあたはず」を、「十四の春にかへるすべなし」と推敲したのは何故だろうか。姉サタの名から直ちに連想されて沼田サタのイメージを否定しなくなったのではないだろうか。「十四の春」とは、この姉の家に

世話になりはじめた年、そして節子を識った年のことであらう。

以上、「東海」歌の前出歌から、「泣く」「涙」「病む」を含む歌を抜き出して考察したが、「病む」に関連して「物に怯えし」が出てきたので、今度は「怯え」や恐怖感をも加え、「東海」歌三首前の脅かされている感情の歌から出発して、該当する歌を考察することにする。

身がまへてはつたと我は睨まへぬ誰ぞ鬼面して人を赫すは(七三)

青草の床ゆはるかに天空の日の蝕を見て我が雲雀病む(七七)

百万の屋根を一度に推しつづす大なる足頭上に来る(八〇)

君に逢はず森を出でむと豹よりも大なる蜘蛛の網にかかれる(八一)

我怖る昨日枯れたる大木の根にぞ見出し一寸の穴(八六)

誰ぞ雲の上より高く名をよびて我が酣睡を破らむとする(八八)

我時に天井にある節穴の目ににらまれて眠る能はず(九一)

悄然として前に行く我を見て我が影もまたうな垂れて行く(九二)

その時に雷の様な哄笑を頭上に聞いて首をちぢめぬ(九五)

幼き日いたくも我は怖れにき聞くことなき叔父の片目を(一〇四)

いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出し白き骨共(一一〇)

床や藍色の血にまみれたる鬼大木をゆるがして泣く(一一三)

(われ半歩たに半歩をあやまりて) (平生(てる目もなし) ただ一歩われあやまりて遅れたる為(半生)に生涯(てる目もなし)を得ず(一一五)

(我君に罪えて入れる牢獄の戸にぞ見いでぬあはれ君が名(一一六)

わが病める心の駒も黒髪を鞭をおそれて跳らむとする(一二〇)

「身がまへて」の歌は、「もろともに死なむ」などと赫す貞子の背後に、何ものかの無気味なイメージを感じて、怯えている状態を歌ったものであろう。

「青草」歌の「青草の床」は、前に述べたように性関係の場、「我が雲雀」は上昇願望を抱いている啄木自身、を意味していると思われる。上昇願望を抱いている啄木が、貞子との関係の場から、はるかに仰ぎ見ている「天空の日の蝕」とは何であらうか。私は、「天空」は文壇、「日」は国木田独歩、「蝕」は病気を象徴したものと推

定する。何故なら、啄木は当時、国木田独歩に心酔していた、ということを示す証拠があるからである。しかも、独歩は重い病床にあったのである。この頃の啄木の小説「二筋の血」と「刑余の叔父」は、それぞれ独歩の「少年の悲哀」と「源叔父」の影響を受けた作品と思われる。独歩が病床にあることを啄木が知っていた証拠も日記にある。この作歌の日の日記に、「わがなつかしき病人が遂に茅ヶ崎で肺に斃れた（昨夜六時）」と聞いた。驚いてその儘真直に帰った。／独歩氏と聞いてすぐ思出すのは「独歩集」である。ああ、この薄倅なる真の詩人は、十年の間人に認められなかつた。認められて僅かに三年、そして死んだ。明治の創作家中の真の作家——あらゆる意味に於て真の作家であつた独歩氏は遂に死んだのか！」（明41・6・24）と書いているのである。独歩は、既に前夜なくなつていたのであつた。

「百万の」の歌は、非常に強い被圧迫感の表現であろう。「大いなる足」は自分を圧迫し怯えさせるものの象徴的表現と思われる。

「君に逢はず」の歌は、貞子の誘惑から漸く逃れうるかと思つたが、今度は、それ以上に大きく自分を脅かすものにつきまともわれてしまった、という意味に解される。

「我怖る」の歌の「枯れたる大木」は、啄木の部屋から見える木であつたと思われる。日記に「Three of them を読みながら、枯れた樅の大木の上の空を眺めて、何とはなく心が暗くなつてしまつた。」（明41・6・17）とある。この大木の根の「一寸の穴」から女体を連想し、恐怖の念がわいたのかもしれない。前に述べたように、貞子が接近すると、怯えるようになったと思われするので。

「誰ぞ雲の上より高く名をよびて我が酣睡を破らむとする」は、眠っていてさえも何ものかに脅かされて、眠りを妨げられる、というような体験で、いわゆるうなされてる状態の表現と思われる。

「我時に天井にある節穴の目ににらまれて眠る能はず」は体験をそのまま歌つたものであろう。

「悄然として前に行く我を見て我が影もまたうな垂れて行く」は、二重身（ドッペルゲンガー）を思わせる歌である。河合隼雄『コンプレックス』岩波新書 昭四七）は芥川竜之介と三島由紀夫がドッペルゲンガーに興味を持っていたことをとりあげて、「両者のドッペルゲンガーに対する興味、そして共に自らの命を絶つことによつて生涯を終えた事実、示唆するところが大きい。ホフマンの書込みにもあつたが、二重身の体験には死の影がつきまともっているようだ。」と述べている。啄木のこの歌は、見られている自分が「悄然として」前に行き、それを見ている自分の影も「またうな垂れて行く」というものであり、心理的危機と不眠による疲憊状態で、二重身もしくは二重身様体験が生じたことを示す歌ではないだろうか。しかも、この頃から啄木に死の影がつきまともうようになったことは、日記を読めば明らかである。

「その時に雷の様なる嗤笑を頭上に聞いて首をちぢめぬ」は、貞子との抱擁中、突然人声か物音を聞いて身がすくんだ、というようなことであらう。

「幼き日いたくも我は怖れにき聞くことなき叔父の片目を」は、実際に子ども時代に感じた、浜民の片目の人への恐怖体験を想起したものである。瀬川もと子氏の証言によれば、当時の浜民には、酒屋の柱にかかつていたはさみで片目をつぶしたKとかという人がいて、啄木も知っていた筈である。また秋浜三郎氏の証言によれば、当時浜民には何人か片目の人がいたが、「メッコサンカク」と呼ばれた三人の片目の男たちは、近所同志で、どの人も一人前で頭も口もしっかりしていて、啄木が怖れたのは、そのうちの「メッコオンチャ」と呼ばれた人のことであらう、ということであつた。

「いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出でし白き骨共」は、浜民の宝徳寺の墓地での恐怖体験を想起したものである。

「凜や藍色の血にまみれたる鬼大木をゆるがして泣く」は、窮地に陥つた啄木の絶叫の歌であらう。

「ただ一歩われあやまりて遅れたる為に生涯勝つことを得ず」は、貞子に誘惑され、深みに入ってぬきさしならなくなり、怯えて夜も眠れず、小説を書けなくなつて、生涯の大事としていた大小説家にならんとする願望が挫折してしまつた、その悔恨の歌と思われる。「我君に罪えて入れる牢獄の戸にぞ見いでぬあはれ君が名」は、貞子との関係についての、「君」に対する罪悪感を歌つたものである。この「君」は誰であろうか。

「わが病める心の駒も黒髪を鞭をおそれて跳らむとする」は、怯え、恐れ、悔恨をいだきながらも、「黒髪を鞭」、すなわち貞子の強い誘惑にひきずられようとする、はげしい心理的葛藤を歌つたものと思われる。

以上は六月二十四日の作歌であるが、恐怖と悔恨の感情が顕著である。恐怖と悔恨の歌は翌二十五日と二十六日にも作られている。いくつか列挙するだけしておく。

初めよりのちなかりしもの如ある砂山を見ては怖るる (一四二)
 いづこまで逃ぐれど我を追ひてくる手のみ大なる膝行の嵐 (二六四)
 わが寝たる蒲団たちまち石となり無限に広し動くあたはず (二六五)
 夜の路天より高き一眼の入道ありて大跨に來る (一六九)

愚かなるいと愚かなる爾よと呼びて漸く涙のごひぬ (一七四)
 とん／＼とまたとん／＼と聞きしことなき音壁に伝はりてくる

(一八七)

ふと深き恐怖をおぼゆ今日我は泣かず笑はず窓をひらかず (二七二)
 ものみなにみに尽く一つづつ眼ありて我をつくづくとみる (二七四)
 大いなるいと大いなる黒きもの家をつぶしてころがりてゆく

(二九四)

次に、「泣きぬるる」ということばを使った詩をとり上げる。「東海」作歌から丁度一カ月後、七月二十四日に作りはじめた「一塊の土」である。

『ただ一日、神よ、願はく
 ただ一日、故郷人の
 眠りをば覚まし給ふな。』
 かくぞ我恒に祈れり、
 今日こそはわれ死になむと
 かなしくも泣きぬるる日に。

神はそを許し給はず
 ただ一日我が故郷に
 人知れず訪ねかへりて

心ゆく許り泣きつつ
 わが家の跡なる土の
 一塊を持て来むものと
 それのみを我は願へど。

(傍点筆者)

神に祈つて眠りから覚めぬようにしたい「故郷人」とは、故郷の死者としか考えられない。「わが家の跡なる土」とは墓の土であろう。この作詩の時期は、自殺念慮が非常に強くなつた時期であり、「一握の砂」というような象徴的表現をかなぐりすてて、原風景のままの「一塊の土」と表現したものである。この作詩の背後の心理状態は、まさに故郷の死者の亡霊につきまとわれていた状態と推定される。啄木はこの日、「流木」「森の中」「山頂」「黒き箱」「白骨」「老人」という詩も作りはじめている。すべて死との関連性が強い詩である。「老人」には、「あはれ、それは既に幾年、わが胸に死にてゐる。初恋の人の白骨」という表現があることは、前に述べておいた。しかも、その一片の骨を、かりりかりりと噛んでいる、というのである。噛むということは、攻撃的感情を、少なくとも含んでいる。と考えられる。詩「老人」における「初恋人」も、詩「一塊の土」における「故郷人」も、共に死者であり、共に作者から否定的態度を向けられている。したがって、同一対象であるとみなしてよ

いであろう。その死者とは、前に、啄木にとって普通の意味の初恋人であったとは思われない、と私が述べた人、そして「砂」に象徴された私が推定した人、沼田サタであろう。

三日後の日記には、「電車で春日町まで来て、広い坂をテクテク上ると、また汗が出た。電車が一台、勢ひよく坂を下つて来た。ハット自分は其前に跳込みたくなつた。然し考へた。自分は自分の歌をかけた扇を持つてゐる。死ぬと、屹度これで自分だといふ事が知れるだろう。——かくて予は死ななかつた。そして、新聞記者をした事があるだけに、自分の驟死の記事の新聞に載つた体裁などを目に浮べた。」(明41・7・27)と書いてある。この日のこととみなして間違いないと思うが、金田一京助(前掲書)は次のように書いてある。「ある日のこと、少しも遅くなつてからだったが、石川君が私の室へ来て、こんなことを云つた。『きょう、外へ出て、どこと云う当もなく、滅茶苦茶に歩いてる内に、伝通院の方から春日町へ下りるあの大きな坂のちょうど中途あたりでしたよ。尿!』と思つて、後から来る電車の前を、一と思いに線路へ跳び込んだものですよ。するとね、車掌が突拍子も無い大声を出しあがつて、馬鹿!』大喝一声すると同時に、ベルを滅茶苦茶に、チリリリとやつたもんで、吃驚して、覚えす——ありゃ本能的ですわ——跳び出したんですよ。殆んど袖をちぎるように車台が僕をかすつて飛んで行きましたよ。僕うっかりすると死んでいたところでしたわねえ!』／＼始終、一諸にいて、石川君の苦しい心境を知り尽していた私も、それを聞いてギクリとした。」と。詩「一塊の土」の「今日こそはわれ死になむ」は、単なる詩的表現ではなかつたのである。亡霊恐怖の深刻さを推測しうる出来事と考えられ得る。

以上のように、「東海」歌の前後には多くの恐怖と悔恨の歌が作られているし、一カ月後ではあるが、明瞭に亡霊への恐怖と関連して、「泣きぬる」ということばが使われているので、私としては「泣きぬれて」は、貞子との関係と娘京子の重病の知らせを契機と

して、過去に体験したことのある亡霊恐怖が生じ、悔恨の念も強くわいているが、このようなことは誰にも語れず、心の底で一人で泣いているという状態を表現したものと推定する。

「磯」について

「蟹と戯る」、「白砂」ならびに「泣きぬれて」それぞれについて、主として前後の歌を分析し、そして総合するという手続で、心理的意味を推定してきた。しかし、残る「東海の小島の磯」については、どの名詞もその前後の歌に見当らない。それ故、これまでのような手続を用いることは出来ない。「白砂」を亡き姉サタと亡き少女沼田サタの象徴と推定したので、まず少なくとも、直ぐ上の「磯」を、文字通りの磯と解することは出来ない。そこで、やはり象徴的表現であろうという仮説を前提として、「磯」の意味を探究していくことにする。手続としては、その意味について仮説をたて、これまでに推定された意味や諸資料と照合して、整合性を検討していく。

私はまず、「磯」は沼田サタの墓がある浜民の宝徳寺あるいは浜民ではないか、という仮説をたててみた。しかし、姉サタの思い出が深いのは盛岡においてであるし、彼女が死去した場所は秋田県の小坂鉱山である。「磯」を浜民と限定すると、亡き姉のイメージと整合しない。そこで、もっとひろげて、岩手県、みちのく、あるいは東北地方という意味の故郷ではないか、という仮説を考えてみたが、今度は上の「東海の小島」、特に「小島」の語感と整合しない。岩手県だけで、四国地方に匹敵する広さを有しているのである。

ところがあることを契機として、別の仮説が頭に浮かんできた。

あることというのは、浜民出身で現在盛岡市に在住の瀬川もと子氏を訪問したことである。瀬川もと子氏は、啄木が「螢の女」と呼んでいた女性であり、「螢狩り」の歌のモデルといわれている人である。また、啄木の妹光子と浜民小学校時代の同級生で、親友であつ

た。私の訪問の目的は、『暇ナ時』第一〇四首「幼き日いたくも我は怖れにき聞くことなき叔父の片目を」の、「片目」の人のモデルが当時浜民にいたか、などの質問をすることであった。いろいろのお話の中で、瀬川医院の次男貞司氏と結婚する前の姓は佐々木であったこと、名は戸籍上はもと子であるが、当時の浜民では、子どもが丈夫に育つようにと、いたこ(巫女)から別の名をつけてもらうという風習があり、自分は「いそ子」とつけられて、みんなから「いそ子さん」と呼ばれてきたこと、啄木が歌を書きつけた紙をたびたびくれたこと、などのお話があった。吉田孤羊著『啄木写真帖』(画文堂 昭四八)には、十六、七歳の頃の写真が掲載されており、「やはり美人の評判が高く、不平不満のかたまりのようであった代用教員時代の啄木にとってはよき慰さめ手であった。」という説明がついている。

この訪問から何日かたって、私の頭に浮かんだのが、「東海の小島の磯」の「磯」は、この「いそ子さん」のことではなかったろうか、という仮説である。啄木は、「東海」作歌の五十日前の日記には、「(略)金田一君の室に泊る。枕についてから故郷の話が出て、茨島の秋草の花と虫の事を云ひ出したが、何とも云へない心地になつて、涙が落ちた。螢の女の事を語つて眠る。」(明治41・5・4)と書いているし、明治四十二年のローマ字日記には、「今日予が実君から聞かされた浜民の話は予にとっては耐え難きまでいろいろの記憶を呼び起こさせるものであつた。(略)その他の人たちの噂、一つとして予の心をときめかせぬものはなかつた——我が『螢の女』いそ子も今は医者弟の妻になつて弘前にいるという。」(明42・5・2)と書いている。また金田一京助(前掲書)も、「尤も石川君は、よく婦人の話はした。吉井君とお互の恋人を算え合つて、自分の数が四分の一にも及ばなかつたと悔しがつて見たり、凡そ当時まで、心に忘れ兼ねる異性の誰彼を、記憶を辿つて興のゆくまゝに語り出すのに、私が一々その名を覚え切れず、また混じたりするもの

だから、名の代りに、螢の女だの、声の女だのと云つて、その人々との甘いロマンスをよく聞かされた。／＼螢の女というのは浜民の代用教員時代の一人の異性のことだった。」と書いている。浜民を去つてからも、啄木の心には、佐々木いそ子の美しいイメージが抱かれていたことは、間違いないであらう。

さらに、さかのほつて明治三十九年の『浜民日記』をみると、八月末に、小説の構想を十六あげ、その十六番目の「本年三月四日、乃ち予が帰任してからの浜民村、(一大社会小説。)」と題したところに、「挿話」として三つ書いているが、真中の一つが、「磯子。恋愛の偏見。」というのである。いそ子に漢字の「磯」が使われているのである。

「東海」歌における「磯」は、佐々木いそ子の象徴的表現であるという仮説について、これ以上の傍証は、他の語との関連もあるので、後で一括してあげることにする。

「東海」について

「東海」という語については、海野哲治郎が『古典—第一号』(明治書院 昭三〇)で、従来の諸家の解釈がきわめてあいまいであるとして、「この歌は函館大森浜の思い出を歌つたのかもしれないが、そこが東の海だから『東海』といつたのではない。啄木は明治三十七年ヨネ・ノグチ(野口米次郎氏)が日本の桜や富士山を歌った英詩集『東海より』を勉強して以来、この語を好み、その論説の中にも『東海君子国』なる語を使用しているので、そのほのぼのとして徹つた語調を愛して、日本を東洋ないし世界的視野においたのである。『東海』はどこでもよいのではなく、辞書にあるとおり『東海君子国』の『東海』すなわち『日本』でなくてはならない。」という主張を述べた。「東海」と『東海より』との関連について指摘した意義は大きい。

しかし、既に「蟹」「白」「砂」「磯」を、それぞれ特定の女性の象徴的表現であると推定してきた私には、「東海」も、この語に係のある女性の象徴的表現ではないか、という仮説が浮かんできた。その女性とは、英詩集『東海より』を啄木に贈ったひと、「白百合の君」すなわち節子である。「東海」作歌から約三カ月後、岩手日報が毎日送られてくるようになったので、啄木はこの新聞との関係の思い出を日記に書いているが、その中に、「三十七年の初刷には、予の『詩談一則』が一頁載つた。これは節子から送られて読んだヨネ、ノグチの『From the Eastern sea』の批評兼紹介で二つ三つは訳して出した詩もあつた様だ。冒頭の句は今でも記憶している。曰く『白百合の君より送られて……』」（日記明41・9・16）と書いている。明らかに、「東海」という語と節子のイメージとの連想度は非常に高い。密着しているといつてもよいかもしれない。

それでは、啄木は「東海」という語を使って、節子を象徴的に表現した、とみなされる例があるだろうか。それは、丁度一年前に函館で作った詩「蟹」である。この詩は、『紅首蓆』明治四十年六月号第六冊に載せたものである。日記『函館の生活』によれば、節子と京子が函館に着いたのは、この年の七月七日である。五月十一日の日記には、「母は米長氏の所へ移り、妻子は盛岡へ行つたといふ。一人どこかへ行つて泣きたい程、波民が恋しかつた。」とある。詩「蟹」を作った時期は、故郷波民を立てて函館に来てから間もなくであり、しかも妻節子は盛岡にいたのである。

この詩「蟹」に節子が歌いこまれたと推定する根拠、ならびにその表現技法の例証は、既に本論文の『「蟹と戯る』について』のところでも述べたので、ここでは省略する。これ以上の傍証は、「磯」の場合と同様に、他の語との関連もあるので、後で一括してあげることにする。

「小島」コノシマ

残るは「小島」である。これまでの意味探究の経過に即して考えれば、これも特定女性の象徴的表現であろう、と考えるのが自然である。「小島」の「小」から直ちに、釧路の芸者小奴が連想された。私は、「小島」は「北海道という島の釧路の小奴」のことではないか、と考えた。小奴のことは余りにも有名なので、説明は省略する。「東海」歌から二十三首目に、「祭壇の前にもとせる七燭のその一燭は黒き蠟燭」という歌が作られている。この歌における数字は、人数を意味していると思われる。「東海」歌に象徴的に歌いこまれている、と私が推定した女性は六人で、それに作者自身の「我」を加えると七人である。「七燭」をその七人とすると、「我」をも「祭壇の前にもとせる」ということになり、少し疑問があるが、二重身をも思わせる歌さへあるので、「我」をこのように対象化して歌うこともありうるだろうと考えた。そして、「黒き蠟燭」は沼田サタの亡霊であると思われる。これで、「東海」歌と「祭壇の」の歌とびつたり整合した、と思った。ところが、啄木は約半月後の七月十一日に、「七人のその一人をも忘れざる今日をよしともかなしとも見る」と歌っている。「一人をも忘れざる」という「七人」に、作者自身を含ませるわけにはいかない。女性七人と考えるのが妥当である。

私は、「東海」歌が女性列挙の歌であるとすれば、もう一人の女性が含まれている筈である、と考えた。再検討の余地のあるのは、この「小島」だけである。「小」は小奴とすれば、もう一人は「島」と関係のある女性である。「島」と関係のある女性を探し求めているうちに、ふと頭に浮かんだのが、詩「水無月」に使われている「渡島の国」ということばであった。この詩は「蟹」と同じく、函館で作られ、『紅首蓆』明治四十年六月号第六冊に載せられたものである。「渡島の国」は、北海道の、もと十一カ国の一つであり、その中心地は函館である。函館といえ、すぐ連想される女性が、橘智恵子である。橘智恵子も、やはり余りにも有名なので、説

明は省略する。小奴同様、啄木の心に残った女性としてよく知られている。

「小」は小奴、「島」は渡島の国の橘智恵子の象徴的表現であるという仮説の、これ以上の傍証は、他の語についての仮説と一緒に、次に一括してあげることにする。

七人の女性について

これまでの論究で私は、「東海」歌の、「我」を除く全部の名詞に、計七人の女性が象徴的に歌いこまれていることを推定した。それぞれについて、分析—総合ならびに諸資料との照合によって、傍証をあげてきた。ここでは、さらに、(1)啄木は多くの思い出の女性をかぞえたこと、(2)かぞえあげられた思い出の女性たちの中に、前記の女性たちが含まれていること、(3)推定された作歌技法が、隣接歌にも推定されること、(4)「東海」歌周辺に、七人を意味すると思われる歌があること、を傍証としてあげる。

(1)啄木は多くの思い出の女性をかぞえたこと。

a 金田一京助(前掲書)は、「尤も石川君は、よく婦人の話をした。吉井君とお互の恋人を算え合って、自分の数が四分の一にも及ばなかったと悔しがって見たり、凡そ当時まで、心に忘れ兼ねる異性の誰彼を、記憶を辿って興のゆくまゝに語り出すのに、私が一々その名を覚え切れず、また混じたりするものだから、名の代りに、螢の女だの、声の女だのと云って、その人々との甘いロマンスをよく聞かされた。／＼螢の女というの、洪民の代用教員時代の一人の異性のことだった。」と書いている。「螢の女」は佐々木いそ子である。「声の女」というのは、吉田孤羊著『啄木を繞る人々』(改造社昭四)ならびに宮本吉次著『啄木の歌とモデルの人々』(妙義出版昭三二)によれば、橘智恵子である。金田一のこの文は、啄木がよく女性の話をしたこと、女性は複数であったこと、その中に佐々木

いそ子と橘智恵子が含まれていたことを示している。

b 啄木自身も、「東海」作歌から六日後の日記に、「(吉井君と)女の話である。二人は其恋人を数へて色々の思出談をやったが、吉井君には十八人許りあった。」(明41・6・30)と書いている。

(2)啄木の女性リストについて

『啄木全集第六卷』(筑摩書房 昭四九)の三〇八—九頁に、「彼の日記の一節」と題した、執筆年月不詳のメモが載っている。これは英語、ドイツ文字、頭文字による約三十人の女性リストである。初めに「人からは唯才のある、気の軽い愉快な男と見られてゐて、突然自殺した男の遺した日記の一節——」という文がある。リスト冒頭の二行は

e. si. (plural.) at nine or ten years old.

y. si. ()

である。今井泰子(『石川啄木論』塙書房 昭四九)は、「宮崎郁雨の示唆により筆者もまた納得するものであるが、『e. si.』とは『elder sister』の略語であろう。次行には『y. si.』とある。『plural』だから次姉トラ(八歳年長)も含まれるが、他の諸資料によってトラはほとんど無視してよい。」(四八二頁)と、述べている。「e. si.」が「elder sister」の略語であろう、ということも私も納得できる。しかし、長姉と解するには疑問がある。「plural.」には略符号がついていて、しかも、妹とみなされる「y. si.」の隣に「ク」がついている。人数の複数と考えると、妹も複数ということになってしまふ。「plural.」は、何かの回数の複数を意味しているのではないだろうか。この女性リストの四番目と七番目に、さらに略したと思われる「pl.」がついている。固有名詞の略とみられる頭文字二つずつのところなので、やはり回数数の複数と思われる。「at nine or ten years old.」については、啄木自身の年齢と考えられる。長姉サタは既に嫁していた時期である。次姉はまだ結婚していない。したがって、「e. si.」は次姉ではなからうか、という疑問である。

さて、リストの九番目は「The she」である。今井（前掲書同頁）は、「疑いもなく節子である。」と述べている。同感である。十番目は「The daughter of carpenters」である。大工の娘ということであるから、沼田サタあるいはヤエであろう。しかしヤエの名前は後に登場する。したがってサタとみなしたいが明確ではない。次の「The actress」は女優であるから、新詩社の劇で演技した植木貞子であろう。

このリストの最後の部分は、啄木の筆蹟のまま印刷されている。見出しをも含めて、暗号めいたドイツ文字で書かれている。星野勝利氏（米文学専攻）の協力を得て解読したが、「忘れな草（Vergiß || mein = nicht）」という見出しの下に、各地の女性計十九名の名前がある。「洪民—金矢ノブ。上野さめ。奥山キヌ。瀬川あい。堀田ひで。佐々木いそ。沼田ヤエ。函館—安波みなえ。高橋すゑ。橋智恵。和賀夫人。小樽—石崎かえ。桜庭ちか。札幌—田中ヒサ。釧路—梅川操。小奴。坪じん。大和いち。東京—植木せん。石川さく。」とある。植木せんは貞子の本名の疑いがあり探究を要する事である。

このメモの執筆年月は不詳であるが、今井泰子（前掲書）によれば、「ローマ字日記」当時の執筆と判断できる、とのことである。「ローマ字日記」は、明治四十二年四月三日から六月十六日までの日記である。「東海」作歌から約一年後の執筆ということになるが、多くの思い出の女性の中に、私があげた女性のうち亡姉を除いて、六人が記されているのである。亡姉サタは記されていないとしても、「東海」作歌前後の日記には、何回も、思い出したことを書いてある。

(3) 推定された作歌技法が、隣接歌にも推定されること。

「東海」歌のすぐ後に作られた歌、「青草の床ゆはるかに天空の日の蝕を見て我が雲雀病む」も、語の背後に人物を推定できる歌である。既に述べたように、「青草の床」には貞子、「天空の日の蝕」は文壇の国木田独歩の病氣、「我が雲雀」は、上昇願望を抱いている

啄木自身が推定される。人物をつぎつぎに象徴的に表現するといふ、「東海」歌の作歌技法をつづけたものと思われる。

さかのぼると、第四十八首は「鳥飛ばず日は中天にとどまりて既に七日人は生れず」である。この歌も、「鳥」は啄木自身、「日」は国木田独歩、そして「人」は作品、特に小説であろう。自分は書けないでいるし、大作家として仰いでいる独歩は病あつく身動きもできない。既に七日、自分は作品をうんでいない、と解される歌である。

第四十九首は「砂煙青水無月の一方に高く揚りて天日をのむ」である。やはり「天日」は独歩で、「砂煙」は死の影であろう。

「東海」歌以前に、既に、人物を象徴的に表現するという技法を用いていた、といつてよいであろう。

(4) 「東海」歌周辺に、七人を意味すると思われる歌があること。まず、多くの女性のイメージがあったことを示す歌からあげていく。

a 「暇ナ時」初頁第一首は、「手に手とる時忘れたる我ありて君に肖ざりし子を思出づ」であり、第三首は、「漂泊の人はかぞへぬ風青き越の峠にあひし少女も」である。貞子と手に手をとった時、貞子とていない女性を思い出したのであろうし、今までの心を惹かれた女性をかぞえあげた中に、風越峠のふもとの荻浜の少女、佐藤藤野も入れた、ということであろう。

b 「暇ナ時」の初めの方では、「千」という字が頻繁に使われ、数の多さを誇張的に表現しているが、女性、または女性を意味することばにも使われ、数多くの女性のイメージがあったことを裏づけるものであろう。第十二首が、「千本のくちの中よりくれなゐの一寸ちをひき得にける妻よ」、第十三首が、「肩をする夏の巷の夜少女の千人の中に入りてかへらじ」、第四十四首が、「千人の少女を入れし蔵の扉に我はひねもす青き壁塗る」である。

c 第九十四首は、「我未だおのが子を食ふ牛を見ず又見ず我を

愛でぬ女を」である。多くの女性のイメージがあつたことを、明らかに示している歌であらう。

d 第九十九首に、「祭壇の前にもとせらる七燭のその一燭は黒き蠟燭」という歌が作られている。「東海」歌から二十三首目であり、同日の作である。この「七燭」は七人であり、「黒き蠟燭」はそのうちの死者であり、しかも作者に無気味な恐怖感を起こしているものと思われる。「黒き蠟燭」は、「砂」に象徴された、と私が推定している沼田サタの亡霊であらう。

この直前の歌「日一日巷々をゆきつくし遂にも逢はず死せる我が児に」(九八)は、我が児京子が死ぬのでは、という強い不安におそれ、彷徨したが、幸いにも死ななかつたという意味と思われる。直後の歌「わが若き日を葬りて立てにたる榻にくちつく君は日も夜も」の、榻(いし)を抱いている、またはくちづけをしている「君」は、沼田サタであらう。

e やはり同日の作、第一百二首は、「七人の隠者一時に森を出て市に來ると城門を閉づ」である。思い出の女性七人を、心の底に秘めておく、という意味であらうか。「七人」という人数は、「祭壇の」の歌との関連を考えると、単なる多数の意味とは思われない。

f 「東海」作歌の翌日、二十五日の作歌に、「すでににして我また多き思出の中の一人を思出にける」(一二六) というのがある。この思い出も女性の思い出であらうし、その中の「一人」は沼田サタであらう。この後、六首目から、「初めよりいのちなかりしもの如ある砂山を見ては怖るる」など、三首の「砂」の歌を続けて作っているのである。

g 前記「砂」の歌の十三首後には、「人をこふこと七度にあまれどもわれは忘れず中の一人も」(一五七)と歌っている。おもな「恋人」七人を想起していたことは、明らかであらう。

h さらにその十三首後に、「庭の木の七本撼れど一本も動かず地に座して涙す」(一二七五)と、またもや「七」を歌っている。直

前の歌は、「愚かなるいと愚かなる爾よと呼びて漸く涙のごひぬ」(一七四)という、罪悪感と自嘲の歌であるし、「涙」が共通している。直前の歌との関連を考え、さらに「七本」を七人の女性とみなせば、まさに「東海」歌と、発想の基底において同じではなからうか。

i さらに三十二首後に、「千本の柱ごとと君が名をかきて終日めぐりては読む」(二十七)とある。心を惹かれた女性を、つぎに想起していることを、歌ったものであらう。

j 七月十一日には、はっきりと七人の思い出を歌っている。「七人のその一人をも忘れざる今日をよしともかなしとも見る」(三三三)である。この「七人」は、当然女性であらう。七人のうち一人は、啄木を怯えさせかなしませて亡霊と考えられるのである。

k 明治四十一年作歌ノート『啄木全集第一巻』筑摩書房 昭四九(二五九頁)によれば、九月二十三日夕にも「七人」の歌を作っている。「七人の中の一人のたきしめし髪をよしと思ひき」である。同日の作歌の四首前は、「黄金の香炉があるらし東海(はゆれ東海守れ)の空ぞくゆるる春のあけぼの」であり、二首後は、「とある時とある処の白砂に指もてかきし名とも思ひぬ(なりと)」である。東海―七人の女性―白砂という連想があつたことを思わせる歌稿である。

l 最後に、さかのぼって、「東海」歌近くの「七」の歌をあげておく。「東海」歌の七首前、「君が名を七度よべばありとある国内の鐘の一時に鳴る」(六九)である。この歌だけを孤立させて読むと、特定の一人の女性の名を七度、もしくは何度もよんでいる、という意味に解されよう。しかし、二首前には「白鬼君によく肖る」、三首前には「故さとの君が垣根」というように、別々の女性をそれぞれ「君」と歌っているし、他の「七」の歌との関連を考えれば、「君が名を七度よべば」を、七人の女性の名をとえたと解することもできよう。

「東海」歌の作歌過程

以上の分析結果を総合して、「東海」歌の作歌過程を次のように推定する。

(1) 啄木は、三年前に知り合った植木貞子との交際を復活させたが、貞子の性的な誘惑と、「小さき墓」の作詩ならびに娘京子が急病で昏睡状態だったという知らせが重なり、不告な関連を想像して怯えるようになり、亡霊恐怖が発生した。

(2) 貞子に対する怯えや嫌悪感が強くなり、交際を絶とうとしたが、貞子はなおやってくる、という状態であった。

(3) 啄木は、亡霊恐怖と、貞子との関係における葛藤によって、極めて深刻な心理的危機に陥り、夜も余り眠れなくなって、大小説家にならんとする願望を達成するために小説を書く、ということもできなくなり、心の底で歎き、悲しみ、泣いた。

(4) このような状態で、啄木は今までに心を惹かれた女性たちを思い出した。妻節子、釧路の芸者小奴、函館の橘智恵子、故郷浜民の佐々木いそ子、亡き姉田村サタ、亡霊の少女沼田サタ、それに今自分を脅かしている植木貞子を含めて、主な女性は七人である。

(5) 七人の女性のうち、ロマンチックな思い出を浮かべることができるのは、節子、小奴、智恵子、いそ子の四人である。

(6) 啄木は、歌の連作過程の中で、心の慰めになるこの四人の女性のイメージを、ひとつの歌に表現したくなり、今まで使っていた象徴的表現技法を活用して、節子は、かつて贈ってくれた英詩集の題名から「東海」、小奴といそ子は、名前の一部分の「小」と「磯」、橘智恵子は、渡島の国という地名から「島」として、「東海の小島の磯」という、海岸の風景を表わす語句にまとめ上げた。

(7) 啄木は、この四人の女性のイメージに向かって心で泣いているので、「東海の小島の磯に泣」と書きはじめたが、亡姉サタを象徴してきた「白」と、同名なのですぐ連想される亡き少女、沼田サタ

を象徴して来た「砂」を結合すれば「白砂」となり、「東海の小島の磯」につづけても、やはり海岸の風景を表わす語句として、まとめうることに気づいた。そして、亡霊恐怖と悔恨のため、涙でぬれてしまふといいたいほど、心で泣いているので、「に泣」を消して、「の白砂に我泣きぬれて」とつづけた。さらに、思い出もあり、切迫した関係になって縁を切ろうとしている貞子を、海岸の、攻撃性を有している小動物「蟹」にたとえ、性関係にまで入ってしまったいつわりの恋愛関係を、「と戯る」と表現した。

「東海」歌の作歌過程を、以上のように推定したが、まだ問題が残っている。「我」を作者自身とみなしてきたが、その意味を探究することと、「泣きぬれて」という表現の背後に推定された、亡霊恐怖の発生過程を説明することである。本論文では後者の問題だけをとり上げておく。

亡霊恐怖について

日記から、亡霊恐怖に関連していると思われる部分を抜き出し、そのプロセスを推定していこう。問題の日は五月二十四日である。

「昨夜は日誌をかいてから、不図頭に浮んだ詩の断片二つ三つ書きつけて寝た。

六時半何やら夢を見て居て、何の訳ともなしに目が覚めると、枕元に白いきものを着た人が立つて居る。それは貞子さんであった。食前の散歩の序、起してやらうと思つて来たとの事。

思出して見たが、何の夢だか解らない。起きると宮崎君から至急といふ手紙。ああ。

京子が熱が出るので医者に見せたら、奥歯が生えるのだつたと云ふ事は、一昨日の手紙にもあつたが、何としてもよくないので大条といふ別の医者に見せると大脳何とか云ふ病気で、初期では大分重いのださうな、昏睡！ああ、子の頭は水つた様な気がした。昨夜かいた断片のうち、幼児の墓に二十年振で父が帰つて来て、お前は死んでよい事をしたと云

ふ意味の詩がある。子の頭は水を浴びせられた！京子の昏睡！

然し、打電しようと思つたのを、医者が其必要がないと打ち消したと云ふのと、此手紙を書いた朝には、昏睡からさめて、物を言つたと云ふので、漸く心を安めた。せつ子の心と友の情だけでも屹度癒る。さうだ、友は「屹度なはず」と書いてよこした。あゝ二百里外の父は！

貞子さんは八時少し前に帰つて行つた。

子と思ふといふ此人が、例になく朝早く来て子を起した。起されて起て、遙かなる海の彼方の愛児が死に瀕してるといふ通知！子は、噎、冷やかなる自然の諧謔に胸を刺された。

不取敢せつ子へ手紙をかいた。そしてかの断片と手紙を持つて金田一君へ行つた。色々話して、京子は決して死なぬと心をきめた。決して死なぬと信じた!!!

小説を書く日ではない！子は三時頃までに「小さき墓」「白き窓」「何故に」「泣くよりも」「白き顔」「嫂」「弁疏」「殺意」の八篇の詩を書いた。書いて居て我ながら胸を抉られる様な心地がした。「小さき墓」を除いて、外の七篇を「泣くよりも」と題して千駄ヶ谷の子謝野氏に送つた。

晚餐を一諸に食つて、八時半まで金田一君と話した。子は、亡き姉と其子等の事を語つた。友も亦、其姉——女にして然も女でなかつた不幸なる姉上——の話がされた。自然は残酷なものだと思つた。それから、一つ年上の女中の事、関流の数学の達人、夏の実昼にも三角術を楽みとして居るといふ漢学好の伯父さんの事。小笠原文学士の事なども話題に上つた。

何をするともない。誰かに手紙書かうかと思つたが、それも厭。論語を読んで少し落付いて十時前に枕についた。例にない事だ。

紅緑の「櫛」の中の「行火」と、花袋集の「マウカ」とを読んだ。何かしら、冷たい疲れが頭をおしつけて居て、……………(日記 明41・5・24)

長いけれども、問題の日の日記なので、全部を引用した。前半の部分に要約して系列化すれば、「幼児の墓のイメージと作詩——睡眠——夢——白いきものを着た人の知覚——貞子の性的誘惑——娘京子重病という手紙の到着——頭が氷つたような気持——娘の昏睡と幼児の墓の詩との連想で不吉な予感——子の頭は水を浴びせられた！」ということ

にならう。

幼児の墓をテーマとした「小さき墓」という詩の概略は、「古木の栗の下に眠っている稚児に、二十とせを経て、父が長き旅より帰つて来たが、外国の港々の物語も、汝の妹が恋人と手を取りかわしている、その幸いも語らない。稚児よ、その終焉の日の笑に彼を迎えよ。汝が父は汝を羨む。」と、^{ほかし}碪に口づけて彼は呟やく。」である。

石田六郎(前掲書)は、「この詩の、『外国の港々の物語』を語らぬ『彼』が、北海を流浪してきた作者自身であり、『二十とせを』ふるさとの『古木の栗の下かげ』に眠る『稚児』が、『二筋の血』の女主人公佐藤藤野の原形沼田サタであり、この『碪』が『二筋の血』の清光童女、すなわち弘濟童女の墓石であることは容易に推量しうるところであらう。」と述べているが、同感である。弘濟童女の墓石の高さは四〇センチメートルである。まさに小さき墓なのである。

啄木は、沼田サタの墓と推定される、小さな墓のイメージを描いて寝た翌朝、夢を見ていたが、どういふわけか目が覚めると、枕元に白いきものを着た人が立っているのを見たのである。啄木は、一年前、函館に行つて間もない五月十一日に、夜の歌会で、「朝ゆけば砂山かげの緑叢の中に君居ぬ白き衣して」という歌を作っている。その日の日記には、「一人どこかへ行つて泣きたい程、洪民が恋しかつた。」と書いていることでもあり、「砂山」をその原風景と思われる土葬の墓とおきかえてみれば、「白き衣」をきている「君」は、白い死装束の女性のイメージであろう。こういう歌を作つたことのある啄木の、夢うつつの眼には、枕元の「白いきものを着た人」は、亡霊とみえたかもしれない。しかも、恐らくは貞子に誘惑されて抱擁中、もしくは抱擁直後に、自分の幼なき娘京子が死に瀕している、という手紙が届くのである。「東海」歌より二十三首前の歌、「相抱く時大空に雲おこり電来り中を劈く」(五三三)は、この時の体験を歌つたものと思われる。六月八日の、降雹をともなつた雷雨

の記憶を、突然脅かした手紙の象徴として使ったものであろう。

この日、啄木は「小説を書く日ではない！」という心境になって、「小さき墓」を含め八篇の詩を書いた。そのうちの「殺意」の概略は、「判官から『何なれば、汝はかの人を惨殺したる。』と問われた我が罪人は、『赤インキ、呀。』と叫び、うちわななきて、『かの君の白き裳裾に、赤インキさと散りし時。』と答えた。」というものである。これは、貞子の誘惑による性関係と、その結果、罪悪感と貞子へのはげしい攻撃的感情がわいたことを物語っている詩であろう。次に、「弁疏」という詩の全文をあげておく。

『われなどて君を厭はむ。
さなり、我、などて厭はむ。』

『さらば、など、かの木の下を
かの人と手とりゆきしや。』

かくぞ君われを誂れる。

『さらばとか。乞ふ、唯一つ、
聞き給へ、我が弁疏を。』

われは唯初めて君を見たる日の
その心もて口づけぬ、かの少女子に。

我つひに二心なし。』

貞子の性的誘惑に陥ったことによる罪悪感から、なじる「君」にいいわけをしている詩である。この「君」は、節子と解せないこともないが、娘京子の重病との関係で、「たたり」を恐れて、「小さき墓」の沼田サタの亡霊にいいわけをしていると考えると、この日の状況に整合する感じがする。

啄木は、これら八篇の詩のうち、「小さき墓」を除き、他の七篇を「泣くよりも」と題して与謝野氏に送ったのであるが、「小さき墓」を除いたのは、娘京子の病氣との不吉な連想によって、発表することに何らかの心理的抵抗が生じたためであろう。

この日、啄木は、夕食時から金田一氏と話し合い、亡き姉とその子どもたちのことを思い出して語っている。日記の最後には、「何かしら、冷たい疲れが頭をおしつけて居て、……」と書いている。まさに、啄木の心胆を寒からしめた日であったのである。

翌二十五日には、「起きると天気。京子の事が心に浮ぶ。(略)宮崎君から葉書。二十三日には京子大分よくて、乳は充分のむから、少し頬が肉付いた様だと云つて来た。氣も昨日よりシツカリした様に思はれると。子は胸を擦つて目を瞑つて、ものに祈る様な心地を抱いた。京子が死なぬと思ふと、氣が少し晴れる。」(日記 明4・5・25)という状態になり、「病院の窓」脱稿の意気込で筆をとつて、午前二時半まで書きつづけた。

五月二十六日、「病院の窓」脱稿直前に妻からの手紙で、京子は余程よく、脳も腸胃も大丈夫だが、医者が来た時、軽いデフテリアだといって血精注射をやったということを知り、「ああ、デフテリアヤ！ 妻の心は！と思ふと涙が落ちた。／＼急いで脱稿すると、満足の心が軽くて疲労の方が重い。」と書いている。「ああ、デフテリアヤ！」と書いた背後には、啄木が八歳の時、十一歳でジフテリアのため急死した沼田サタのことが直ちに連想され、またもや不吉な思いがわいたことが想像される。「京子は余程よく」ということで、小説脱稿後の気分を「満足の心が軽くて疲労の方が重い。」と書いているのは、この不吉な連想によるものと思われる。

五月二十七日、この日も問題の日であるので、日記の全文をあげておく。

「五月二十七日

六時四十分頃であつたらうか。目を覚ますと枕辺に座れる白衣の人、散歩の序といって貞子さんが来てゐたのだ。降りそめた細い雨に誘はるる怨言は、雨によく調和してゐる。

一日雨。そこともなく疲れてゐる。二三日前に書いた詩を第二集に写

して日を暮す。数限りなき思出が、断間もなく湧いた。

夕飯は金田一君と共に。

夜八時四十分頃。女中が一通の電報を持って来た。開かぬうちの胸さわぎ。噫、京は遂に死んだかと思ふと身体中寒くなつた。が、ケイクワヨン、イサイアトヨリ。

子はホツと息をして、胸を撫で下した。涙が！早速宮崎君へ葉書。

何をする気にもなれぬ。十時頃例になく寝た。枕の上で紅緑の「楳」を読む。(日記 明41・5・27)

この日の経過を要約して系列化すると、「目を覚ます―枕辺に座れる白衣の人の知覚―貞子であることの認知―貞子の怨言―疲労感―数限りなき思い出―夜八時四十分頃電報―胸さわぎ―ホツとする。」ということになる。貞子が朝、啄木の覚めやらぬうちに、白い着物で来た日には、二回とも、至急の来信があり、啄木の心胆を寒からしめたのである。

私は、『啄木全集第六卷』(筑摩書房 昭四九)の二九八―九頁の、無題の一文は、この日の貞子の怨み言に伴う体験を、材料にしたものであると思う。「お葉」は、植木という姓との連想で、貞子と推定されるし、「お佐代」は、サという音の共通するサタと推定される。「死んだ妹」としていることでもあり、やはり沼田サタであらう。この一文の主要な部分を引用しておこう。

「……女が突然自分の膝に突伏して、身を震はして直泣きに泣く。貴方は私を見捨てる気でせうと言つて泣く。体も服装も、平生の通りのお葉さんには違ひないが、其声がお葉さんの声でない。訝しい。が、困つた。怎したものだらうと当惑する中にも、何処か怎う快い様なところもあつて、女の背を撫でてやつた。何か言はうとすると、女は急に声を張り上げて泣く。(略)

夢を見て居たのだ、と思出すと、周之助は、天井の節穴に腫を屈ゑて、覚束ない夢の筋道を胸の中で辿り出した。――お葉さんが泣いた。それはお葉さんの室であつた。(略)自分は突然隣の襖を開けると、其所はお葉さんの室になつてゐて、自分を見るや否や、お葉さんは裁縫を投出

して来て、見捨てる気だらうと泣いた。

何だ、取留もない、夢ぢやないかと自分で打消しても見たが、實際は周之助の心に問うてみて、余り取留のない事でもないので、何時か知ら厭な顔になつた。怎してお葉さんは那麽声を出したらうと言ふ考へが、チラリと頭脳に浮んだ。平生の声ではなかつた。

然うだ、それで自分は物言はずに立つて、襖を明けるとお葉さんが裁縫をしてゐた。基室はお葉さんの室だつた。そして、見捨てる気だらうつて泣いたのだ。其声が、訝しいな、怎してお葉さんの平生の声でなかつたらう。怎も訝しい。何でもよく聞いた事のある声だつたが……

妹――死んだ妹の声だと、稍あつてから心づいた周之助は、一人で妙な顔をして眼を大きくした。死んだお佐代！然うだ、お佐代の声だつた。お佐代とお葉さん！お葉さんがお佐代の声で泣くとは、夢とは謂へ不思議な話である。お佐代は去年の十月、拾度十個月前に死んだのだも。(以下断絶)(執筆年月不詳)

貞子の怨み言を聞いているうちに、その声が亡き沼田サタの声に似ていると感じられてきて、気味が悪くなつた、という体験があつた、と考へてよくはないだろうか。「東海」歌の三首前の、「身がまへてはつたと我は睨まへぬ誰ぞ鬼面して人を脅すは」(七三)とも符合する断片である。

五月二十八日の日記には、「(略)『母』の稿を起さんととして、四行かいて裂いて了ふ。心が妙に沈んでゐる。(略)夜にな「る」とすぐ枕についた。雨の音、竹の声、古い日誌を出して見て幾度も幾度も泣いた。死んだ姉！其子等！あゝ浜民！函館！小樽！泣くべき事が、かなしいかな、子の半生に極めて多い。父の事も泣いた。母の事も泣いた。死の淵に臨んでゐる京子、それが怎しても肥つた血色のよい顔だけ目に見えるので、どうやつれたかまるでわからぬ。此可愛い京ちゃんが、今二百里外の海の彼方で死ぬほどの大病！と思ふと、胸の中は！

ランプは早く消したが二時まで眠れなかつた。(日記 明41・5

・28)とある。

「心が妙に沈んでゐる」し、枕についてから「雨の音、竹の声」を聞き、死んだ姉を思い出し、「あゝ洩民！」と泣き、大病の京子のことを心配し、二時まで眠れなかったというのである。今までの考察にもとづけば、この日記の背後に、沼田サタの連想があったと想像される。この日から不眠が始まり、持続するのである。

五月二十九日には、「雨は上つたが、灰色の雲が深く低れて全都を圧してゐる。障子も煙草も心も湿り切つて居た。」(日記 明41・5・29)と書いている。宮崎宛書簡では、この頃のことを、「二十七、八、九の三日間は、いふも女々しき心地に打過し、古き日誌など繕どきて、足一步も室を出でず。この頃より不眠症の奴に捕はれ、大抵暁になつて人の起きてからでなくては眠れず、随つて毎日二食主義を厲行いたし居候。」(宮崎大四郎宛 明41・6・8)と述べている。「不眠症」と自己診断したのである。

五月三十日、「此頃、夜に寝つかれぬ癖がついた。」(日記 明41・5・30)と、六月一日には、「昨夜、一時頃に枕についたが、怎しても寝つかれなくつて、到頭、夜が明けて女中が窓の戸を明けるに來た時まで、うつらうつらと物思ひにくらした。夜が明けてから三四時間眠る。」(日記 明41・6・1)とある。

六月二日、「堀田秀子さんから、紫インキで書いた手紙、予の教へた子らの消息がよなくも嬉しい。新設の高等二年には、栄二郎と慶三が入つたと。封じこめたまるめるの花にも故里の匂ひがする。あはれなつかしき洩民の閑古鳥! (略) 満足を以て枕についたが、不眠症のため、四時の時計の鳴るのまで聞いた。色々の妄想に耽つた。」(日記 明41・6・2)と書いている。「あはれなつかしき洩民の閑古鳥!」と書いた背後には、どんな心境があつたであろうか。明治三十八年五月に「東北新聞」に載せた手記、『わかば衣』の末尾には、「生立の記念多きふる郷の青野、もえもゆる若草の中に、恋しき人もや眠りぬらむ。我が好む暁の鳥の聲に、この世の外の

浄業の国の信や聴きつべきなど、身は塵芥をたどり乍ら、心すては決して遠く北天の雲に乗りうつれば、都にはなき閑古鳥の一声、二声、いづれよりとなく落ち來りて、幻か現か、恍々として我が心頭に鳴くと覚えぬ。(未完)』(啄木全集第四卷)筑摩書房 昭四九(傍点筆者)とある。石田六郎(前掲書)は、鋭くこの文に注目し、「ここに、この詩人が『恋しき人』と『暁の鳥』とを、ともに『この世の外の浄業の国の信や聴きつべき』ものと感取して兩者を同一視するところから、閑古鳥が『恋しき人』の遊離魂となる、この詩人の象徴發生の心理的メカニズムをみてとることができよう。」と述べている。首肯しうる見解である。若草の中に眠っている「恋しき人」は、沼田サタであろう。したがって、「あはれなつかしき洩民の閑古鳥!」の背後に、沼田サタの靈魂を感じていた、と言つてよいであろう。なお、この日の日記で、「妄想」という語を使ひはじめてゐることも、注目すべきことである。

六月三日には、「此夜も四時の黎明まで眠らず。」と日記に書いてゐる。

六月四日に脱稿した小説「天鵝絨」の女主人公は、農家の娘「お定」と大工の娘「お八重」である。沼田サタは、石田六郎の調査によれば通称サダ子であり、父親は大工沼田末吉、妹がヤエなのである。この小説の執筆において、沼田サタとヤエのイメージが啄木の念頭にあつたことは、間違ひなく推定できるであろう。

六月八日、日記には「晴れた日であるが、怎やら頭が常の如くでなくて、ペンを執つてもまるで興が湧かぬ。」とある。この日、降電を伴う雷雨があつたが、「電を見ながら、金田一君と語つた。粉屋の娘の水車で死んだ話。コルサコフの組人の麵麩売の話。アイヌ人の宴会の話。」と書いている。

翌日、六月九日の日記の冒頭には、「昨夜寝てから、次の様なものを書かうと考へた。『二筋の血』(幼時に見た悲哀)」とある。この「二筋の血」こそ、金田一氏の語つた「粉屋の娘の水車で死ん

だ話」に触発され、国木田独歩の作品「少年の悲哀」を念頭に浮かべ、この年の四月二十六日に荻の浜であった佐藤藤野の名前を、そのまま女主人公の名前とし、水車事故で急死した「藤野」の戒名は、沼田サタの戒名である弘濟童女のコウセイという音を転倒し、文字を変えて「清光童女」とした、と推定される小説である。この推定は石田六郎の研究に負っているものであることを、ことわっておきたい。

啄木は、六月十一日、二時までかかって、「二筋の血」三十三枚脱稿した。沼田サタのイメージをこの小説におり込んで、その亡霊を慰めようとしたのかもしれないが、「不眠症」と「妄想」はまだつづく。

六月十五日、「今日は遂々書かず了ひ。(略)夜は三時打つまで眠れなかつた。六月十六日、「何もしたくない日。(略)色々の妄想になやまされて一日を暮らした。夜になつても筆とる気がしない。」六月十七日、「Three of them を読みながら、枯れた樅の大木の上の空を眺めて、何とはなく心が暗くなつてしまつた。(略)夜金田一君と語る。予は予の姉——亡き姉の事を詳しく語つた。何とも云へぬ心地になつた。十二時半頃になると、女中が来て、モウ話はやめてくれと云ふ。／＼枕について Three of them を読みながら眠らうとしたが、一時間許りは眠れなかつた。」六月十八日、「何も書く気になれぬ日であつた。胸の中には十も二十も材料があつてゐて、それで書く気になれぬ。(略)無聊な一日。寝てから古雑誌など読んで、一時の時計をきいた。窓の外にイヤな風の音がきこえた。」と、それぞれ日記に書いている。「イヤな風の音がきこえを感じを与えることばである。六月二十日には、「貞子さんに最後の手紙をかいて寝る。」六月二十二日には、「今日は生れて初めて散文詩といふものを書いた。『曠野』 『白い鳥 血の海』 『火星の芝居』の三篇。」と日記に書いている。

私には、「白い鳥 血の海」は亡霊恐怖と関連が深いと思われる

ので、概略を述べた上で考察をしておく。概略は次の通りである。

変な夢を見た。——

誰とも知れぬ、紅の衣を着た恋人と、大きい真黒な船に、唯二人で乗っている。或る日のこと、幾億万羽の白い鳥が、金色の太陽をかくしてしまつた。彼等は、一様に羽ばたきをするので、妙なすさまじい響きになつて聞える。その鳥どもは、一羽、一羽下りて来て、恋人の掌に接吻してゆく。その手には、私が贈つた黄金の指環がのつている。

その指環に接吻して行つた鳥は、白い羽の生えた人の顔になつていた。最後に、やや大きい鳥が恋人の手に近づいたと見ると、恋人が一声けたたましく叫んで後に倒れた。黄金の指環をくわえた鳥は、大きい輪を描いて櫓のまわりを飛んだ。どうしたのか、この鳥だけは人の顔にならずに。

私は、弓を取るより早く、白銀の鎗矢を射た。矢は鳥を貫いた。鳥の腹はさつと血に染まつた。と、私を目がけて落ちて来た。私は身をおかして、剣の束に手をかけると、鳥は船尾の直ぐ後の海中に落ちた。涯なき大洋が忽ちに一面の血紅の海!

唯一点の白は痛ましげなる鳥の屍である。と思つた次の瞬間には、燃ゆるような紅の衣を海一面に拡げた、恋人の顔であつた。

船が駛る、駛る。矢の如く駛る。海中の顔は瞬一瞬に後に遠ざかる。……

空には数知れぬ人の顔の、羽搏の響きと、鳥裂く如く異様な泣声。……

まさに、妖気を感じさせる幻想の世界である。私は、「白い鳥」は死者、「黄金の指環」は文学作品、それに接吻するというのは、作品の中で美化されること、接吻した鳥が「白い羽の生えた人の顔になる」というのは、半分復活して人間界とつながりをもつ不死鳥

になること、「最後の、やや大きい鳥」は沼田サタの亡霊、それが近づいたとき倒れた「恋人」は、サタの亡霊のたたりを恐れた作者により、拒否されるはめになった貞子、「黄金の指環をくわえたけれども人の顔にならない」というのは、いくら作品で美化しても、なお亡霊として悩ませていること、その鳥に「矢を射た」というのは、サタの亡霊が貞子の姿をかりて悩ませると思われるので、貞子との交際を絶つべく最後の手紙を書いたこと、「唯一点の白は痛ましげなる鳥の屍である。と思った次の瞬間には、燃ゆるような紅の衣を海一面に拡げた、恋人の顔であった。」というのは、最後の手紙を出した後、かつて「火の如き少女つと出づ虚なる都の響き轟たる中ゆ」と歌ったころの、貞子のイメージが浮かんできたということ、「帛裂く如げ異様な泣声。……」というのは、なお亡霊恐怖がつきまとい続けていることを、幻想的に表現したものと思う。

散文詩「曠野」は、『暇ナ時』の六月二十五日の歌、「我時々見知らぬものに誘はれて曠野の中に捨てられて泣く」(二三〇)と、発想が同じである。散文詩「曠野」には、「涯もない曠野、海に起伏す波に似て、見ゆる限りの青草の中に、幅二尺許りの、唯一の細路が真直に走つてゐる。空は一面の灰色の雲、針の目程の隙もなく閉して、黒鉄の棺桶の蓋の如く、重く曠野を覆うてゐる。」という文がある。「青草」という語、「棺桶」という語が使われている。六月十二日に脱稿した小説「二筋の血」の終末近くでは、「所詮は皆一様に死ぬけれども、死んだとして同じ墓に眠れるでもない。大地の上の処々、僅か六尺に足らぬ穴に葬られて、それで言語も通はねば、顔も見ぬ。上には青草が生える許り。」と書いている。どうやら、啄木の頭の中では、「青草」と土葬の墓地との連合が、かなり強かったようである。現在でも、宝徳寺墓地には青々とした草が沢山生えており、奥の方では生い茂っている。多くの墓石の間、そこかしこに土まんじゅうと塔婆があり、「幅二尺許り」の「細路」もある。散文詩「曠野」の原風景は、宝徳寺墓地であったと思われる。

る。したがって、この詩もやはり、亡霊恐怖と関連していた、といえるであろう。

さて、日記の検討を先に進めよう。六月二十三日の日記の中ほどから引用する。

「夕方二時間許り金田一君と語る。繋の温泉の白痴な男と美しい優しい娘の話。」

吉井君と後藤宙外と春陽堂の高崎春月氏へ手紙かいた。

金星会の詠草と、一倉はまじ子からの手紙と、境田天祥からの葉書と、外に貞子さんから今夜是非来てくれといふ葉書が来たが、行かなかつた。恋をするなら、仄かな恋に限る。

散文詩「二人連」「祖父」の二篇をかく。昨日の三篇と合せて与謝野氏に送る。手紙もかいた。

終日雨降であつたが、滅多にない程頭の明瞭した日であつた。暮れから一寸出て花瓶を一つ買つて来た。其あとに貞子さんが来て行つたといふ事であつた。

百合の花の香の仄かに籠つた室に寝る心安さ(日記 明41・6・23)

前の日に、散文詩「白い鳥、血の海」で、亡霊に対して、どぎついと考えるほどの攻撃的感情を表現することができたためか、そして金田一氏の「美しい優しい娘の話」を聞いたためか、この日作つた散文詩「祖父」の女主人公は、「五歳になるお雪」で、「山桃の花の様に可愛い児」である。お雪は、祖父である六十を越した老爺と二人だけで、山の上の森の一軒家に住んでいる。この老爺は「六尺に近い大男で、此年齢になつても腰も屈らず、無病息災、頭顱が美事に禿げてあて、赤銅色の顔に、左の眼が盲れて」いる。

前にも述べたように、秋浜三郎氏の証言によれば、当時の浜民には、「メッコサンサク」とあだ名された。近所同志の三人の片目の男たちがいたという。どの人も、頭が禿げて、しごとと同じ、一人前で、口も頭もしっかりした達者な人たちで、「幼き日いたくも我は怖れにき開くことなき叔父の片目を」という歌にあるように、啄

木が怖れたのは、三人のうちの「メッコオンチャ」と呼ばれた人のことであろう、ということであった。散文詩「祖父」の老爺は、次に引用するように、「恐ろしい顔になって」来ることもあり、モデルは、やはり「メッコオンチャ」と呼ばれていた人であったと思われる。「祖父」の終末部分は次の通りである。

「お雪は無言で其顔を噴^つつてゐたが、見る見る老爺の顔が——今まで何とも思はなかつたのに——恐ろしい顔になって来た。言ふべからざる恐怖の情^{なさけ}が湧いた。譬^{たとへ}へて見ようなら見も知らぬ猛獣の寝息を覗^{のぞ}つてる様な心地である。

するとお雪は、遽^{たち}かに、見た事のない生みの母——常々美しい女だったと話に聞いた生みの母が、恋しくなつた。そして、到頭^{とうとう}声を出してわつと泣いた。

其声^{こゝろ}に目を覚ました老爺が、
『怎^{どう}しただ？』

と言つて体を起しかけた時、お雪は一層^{いっそう}烈しく泣き出した。

老爺は、一つしかない目を大きく睜^{ひら}つて、妙に顔を歪^こめてお雪——最愛のお雪を見据^{みま}多た。口元が痙攣^{けいれん}けてゐる。胸が死ぬ程苦しくなつて、嘔^{おう}気を催^{もよほ}して来た。老い果てた心臓はどきり、どきり、と、不規則な鼓動を弱つた体に伝へた。』

「見る見る老爺の顔」が「恐ろしい顔」になり、「言ふべからざる恐怖の情」がわいたというところは、前に引用した無題の一文の、「お葉さんがお佐代の声で泣く」というところと、通じるものを感じられる。また「お雪」という名前も、前日に作つた散文詩の「白い鳥」の「白」が背後に感じられるし、お雪の生みの母はいないのである。啄木は、やはり、亡き沼田サタをモデルに使つたと推定されるし、無気味な恐怖を織り込んでるので、これまでの考察と関連させれば、この散文詩「祖父」も、沼田サタの亡霊への恐怖が基底にある作品といえよう。

ただ、前日に作つた「白い鳥、血の海」のような、ストレート

な表現ではなくて、サタと思われる少女を美化しており、恐怖感情は、「老爺」に投射している点に、注目しておかねばならない。この点と、日記に「滅多にない程頭の明瞭した日であった。」と書いた心境は、関連があると思われる。日記には、「貞子さんから今夜是非来てくれといふ葉書が来たが、行かなかつた。」とも書いている。恐らく、啄木には、無気味な恐怖を感じさせる貞子との縁を切る事ができる、という見通しがついたので、亡霊恐怖も緩和されたのではないだろうか。日記の末尾には、「百合の花の香の仄かに籠つた室に寝る心安さし」とある。リラックスしたのであろう。かくて、枕についてから爆発的作歌活動がはじまるのである。

啄木は、翌日二十四日の午前十一時頃までに、「東海」歌を含む百二十首余の歌を作つた。さらに二十五日にも、爆発的作歌がつづいた。しかし、二十七日から、「死にたい」という願望が強くなり、それが持続して、七月二十七日には、下宿料を強く催促されたことを契機として「決心」し、電車の前にとびこむのである。その状況と、その二三日前の作詩にあらわれた亡霊恐怖については、既に述べたので、ここでは省略する。

五月二十四日以来の日記と作品についての以上の分析によれば、啄木の死の願望の背後には、沼田サタの亡霊への恐怖があったと推定されるのである。

さて、啄木の亡霊恐怖の経過を推定してきたが、まだ問題はある。詩「小さき墓」——貞子の性的誘惑——娘京子重病の知らせ、という関連で亡霊恐怖が発生したのなら、娘京子の回復後も亡霊恐怖がつづいたのは何故だろうか、という疑問である。私は、『暇ナ時』第三十九首、「帰り来し心をいたむ何処にてさは衣裂き泣きて歩める」と照らし合わせると、啄木の亡霊恐怖は、この時が初めてではなかつたと思うのである。

啄木の亡霊恐怖の起原について、私は既に仮説と傍証を用意してあるが、紙数の関係から、本論文では、仮説とその根拠だけを簡単

にあげておくにとどめる。

亡霊恐怖の起原についての仮説

第一は、啄木は沼田サタと何らかの性的な接触をもったことがあろう、という仮説である。その根拠は、前に引用した「彼の日記の一節」と題したメモである。大工末吉の娘サタと解される「The daughter of carpenters」の前後に書かれた女性たちは、啄木が性関係を結んだ相手と思われる。また、啄木が小学校時代に異性との接触の可能性があったことについては、今井泰子が『石川啄木論』（前掲書）で引用した、宮崎郁雨の書簡が裏づけとなる。

第二は、啄木は、沼田サタの土葬の墓から骨を掘り出したことがあろう、という仮説である。この仮説をたてた根拠は、「いたく錆びしピストル出でぬ砂山の砂を指もて掘りてありしに」（『一握の砂』）という歌である。「砂山」を土葬の墓とみなせば、「いたく錆びしピストル」とは、古い骨ということになる。

第三は、啄木はその骨を踏んだのであろう、という仮説である。その根拠は、「ふるさとの寺の御廊に踏みにける小櫛の蝶を夢に見しかな」（『暇ナ時』四二三 明41・8・8）という歌である。「寺の御廊」は墓地の通路、「小櫛の蝶」は少女の骨を意味していると思われる。

第四は、啄木は、誰かから「墓の骨を粗末に扱うと、体にさわりが来るなどのたたりがある」というような話を聞かされ、何らかの契機でその話を自分の行為と結びつけ、恐怖をおぼえるようになったのであろう、という仮説である。

最後に付記したいことがある。第一は、啄木は長期にわたって自己催眠を実施したと思われるが、亡霊のイメージを強める効果もあったのではなからうかということ、第二は、啄木は日記で、幽霊の存在は確実なる理由を有する合理的の事柄である、と述べているこ

と、第三は、私が「亡霊」という語を使ったのは、啄木が「幽霊」よりも「亡霊」の方を多く使ったからである、ということである。